別紙 1

距離規制の妥当性について検証するための事例

ここでは、過去に枯渇化現象が生じた3つの温泉地を取り上げ、どのような源泉間 の距離でなら枯渇化現象が生じないかを探ることとする。

なお、ここで考える源泉分布域とは、温泉を集水する地域としての性格を考慮していることから、主要な源泉を真円で包含させることができる面積として考えた。また、源泉の温泉湧出能力は地域毎、源泉毎で変化に富むことから、その温泉地内にある源泉数から適正な源泉距離を考察するのではなく、その温泉地からどれほどの温泉を採取していたのかを検証し、これを1源泉当たり湧出量の全国平均である100L/分で除すことでその地域内の源泉数に換算。その数値から1源泉が必要とする面積を算出し、また、その数値から源泉間距離を逆算した。

その検討結果を以下に示す。

(1) A温泉

枯渇現象の状況 A温泉は、当初は自噴利用が中心であったのが、昭和31年以降、動力揚湯が行われ始め、昭和33年2月には自噴利用から揚湯利用への変更を追認し、昭和36年10月の審議内規の改正では動力揚湯を正式に認めるに至った。これに伴い、湧出量が増加し、枯渇化現象が出現し始めた。具体的な状況は以ての通りである。 昭和29年当時のA温泉は利用源泉数が63で、自然水位は0~-1.0m、揚湯が
和36年10月の審議内規の改正では動力揚湯を正式に認めるに至った。これに伴い、湧出量が増加し、枯渇化現象が出現し始めた。具体的な状況は以下の通りである。
に伴い、湧出量が増加し、枯渇化現象が出現し始めた。具体的な状況は以下の通りである。
の通りである。
昭和29年当時のA温泉は利用源泉数が63で、自然水位は0~-1.0m、揚湯オ
位は-0.10~-3.0m、1井当りの平均湧出量は14.91L/分、全湧出量は約940L
分(日量 1353m³)であって、自然湧出量の範囲内で需要に答えてきた。
ところが、昭和33年4月の役場の調査によると、総湧出量(1556m³/日)に
昭和31 (1956) 年4月以降、18%の増加を示した。
昭和34年には利用源泉数が68と微増し、総湧出量は昭和29年時の940L/分
から 1,345L/分へと 43%増加した。
さらに昭和39年の調査時に、利用源泉数が63に減ったものの、総湧出量に
1,424L/分(51.5%増加)に増加している。その結果、揚湯水位は-0.1~-3.0
から-4.7~-9.02m へと低下し、周辺あるいは上部から地下水の浸入を招来
し、孔底温度と泉温の低下、溶存成分量の減少となって現れてきた。
以上のような経緯から、A温泉が洪積層の温泉層(第2次温泉源)から採り
している限り、昭和 29 年時の湧出量(約 940L/分)にもどらなければ、過剰
揚湯といわざるを得ない状況であることが指摘された。
現在の状況 平成 17 年当時のA温泉の利用源泉数は 44 に減り、総湧出量は 1,100L/分台
に減じ、平均泉温は 37.3℃から 40.5℃へと回復している。温泉水位は昭和
39年当時より若干低下している傾向があるものの、目立った低下ではなく、

	昭和39年当時よりも健全化(回復)しているといえる。しかし、昭和29年
	時に比較すれば、平均泉温は未だ低く、温泉水位も最大 10m 近く低下してい
	るので、A温泉の適正湧出量は昭和 29 年時の 940L/分程度として、大きな間
	違いはないものと思われる。
源泉分布面積	$1.400\mathrm{km}^2$
源泉密度と源泉	A温泉における昭和29年当時の温泉湧出量100L/分当たりの面積は0.149km²
間距離	となり、その状態での <mark>源泉間距離は413m</mark> となる(表1参照)。

(2) B温泉

枯渇現象の状況	B温泉は、大正末期頃までは自然湧出あるいは掘削自噴の状態が続いていた。
	戦後の高度成長期に入ると、多数の人が競うように新規の掘削を行い、揚湯
	を行うようになった。昭和52年当時で合計137もの源泉が所在した。その結
	果、温泉水位は急激に低下し、昭和26年当時には地表面下20m位であったも
	のが、35 年頃には 100m (利用源泉数は 65、総湧出量は約 2,600L/分) になり、
	50 年頃には 200m (利用源泉数は 95、総湧出量は約 3,300L/分) にまで低下し
	た。これにより、昭和 35 年には 1 井当たり 7.94 馬力で足りていた動力が、
	昭和 50 年には 15.78 馬力もの動力が必要となり、1 馬力当たりで揚湯できる
	量は逆に減少する事態となった。なお、昭和38年以降、平均温度の低下はほ
	とんどない (おおむね 58℃程度)。
現在の状況	昭和53年から集中管理による給湯が行われている。これにより、稼働源泉数
	は 55~53 に減じ、総湧出量も約 2500L/分程度まで減少させた。その結果、
	昭和56年には温泉水位は地表面下140m台にまで回復している。
源泉分布面積	4. 400km ²
源泉密度と源泉	昭和53年の集中管理以後の湧出量100L/分当たりの面積は0.176km²で、その
間距離	状態での源泉間距離は449mとなる (表1参照)。

(3) C温泉

枯渇現象の状況	C温泉は、明治	31年の記	録では源泉数	は20、昭和10:	年代までは自然湧出泉					
	や掘削自噴泉な	や掘削自噴泉が存在し、昭和21年までは自然湧出泉と小規模揚湯泉とが共存								
	した。しかし、	した。しかし、昭和22年以降乱掘・増掘競争が始まり、昭和25年には自噴								
	泉が姿を消した	泉が姿を消した。								
	これまでの温泉	これまでの温泉湧出量や温度、温泉水位の変化状況は以下の通りである。								
	年	源泉数	平均温度	温泉採取量	温泉水位 (標高)					
	昭和 15 年	16	66. 0℃	約 540L/分	約 90m					
	昭和 30 年	30	60.9℃	約 1,280L/分	約 70m					
	昭和 35 年	45	58. 2℃	約 2,260L/分	約 30m					
	昭和 44 年	58	53. 7℃	約 2,000L/分	約 14m					
	昭和 50 年	54	54.0℃	約 1,700L/分	約 18m					

現在の状況	昭和56年から集中管理による給湯が行われ、それまでと比較して総湧出量は
	約1,800L/分であまり変わらないものの、稼働源泉数は34に減じた。その結
	果、昭和 57 年には温度は 60.8℃に、温泉水位は海抜 80m 程度に回復した。
	稼働源泉数の減少にはその後も努力し、平成年代に入ると 22~24 井となって
	いる。この間の総湧出量は1,700~1,900L/分の範囲で推移し、温泉水位も海
	抜70m程度で安定している。
源泉分布面積	2.030km^2
枯渇現象発生時	枯渇化の進行を止めることができた集中管理以後の湧出量 100L/分当たりの
の源泉の密度	面積は0.119km2で、その状態での源泉間距離は369mとなる(表1参照)。

以上のとおり、現状(資源保護のための対策実施後)又は枯渇化現象発生前の温泉 採取量から、1源泉当たりの所要面積を計算すると 0.119~0.176 k m²となる。これが 温泉資源の枯渇化現象を抑えるために必要な源泉密度となり、この密度の源泉を均等 に配置するために必要な源泉間の距離は 369~449mとなる。

(参考)

最も高い密度で源泉を配置した場合の1源泉あたりの所要面積

 $(0.866\,\alpha^2\,\mathrm{k}\,\mathrm{m}^2\,(=\sqrt{3}/2\,\alpha^2\,\mathrm{k}\,\mathrm{m}^2))$ の考え方

距離規制の距離を α kmとした場合、最も高い密度で源泉を配置する方法は、一辺 α kmの正三角形の各頂点に源泉がある形である。それら正三角形の集合体からなる平面を源泉を中心とする四角形でモザイク状に剥ぎ取ると仮定すると、四角形は(α)と($\sqrt{3}/2\alpha$)を2辺とする長方形となる。ただし、長方形を用いたのは、区域内の空間を隙間なく均等に見積もるためであり、水文学的な考えを反映したものではない。

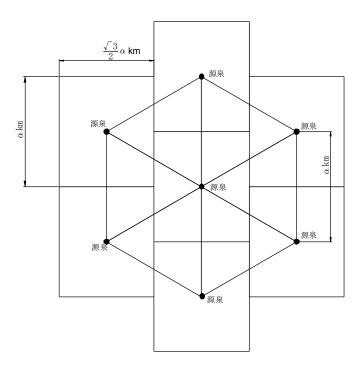


表 1 源泉分布面積と 100L/分当たり所要面積、源泉間距離

	A温泉	B温泉	C温泉
①源泉分布面積(km²)	1. 400	4. 400	2. 030
②合計温泉湧出量 (L/分)	940	2500	1700
③1 源泉(100L/分)当たりの所要面積(km²)	0. 149	0. 176	0. 119
④上記に必要な源泉間距離 (=1.07√3, m)	413	449	369

距離規制の距離を α k m とした場合、最も高い密度で源泉を配置する方法は、一辺 α k m の正 三角形の各頂点に源泉がある形である。その場合の 1 源泉当たりの面積は、0.866 α 2 k m 2 (= $\sqrt{3}/2$ α 2 k m 3) となる。逆に、 1 源泉当たりの面積として β k m 3 を確保するためには、各源泉の間に 1.07 $\sqrt{\beta}$ k m 以上の距離を取れば十分となる。

別紙 2

熱収支について

熱収支の考えは、温泉を採取することで地下から奪われる熱量と、地球内部からの 熱伝導で獲得できる熱量とを比較し、両者が釣り合うことで熱量的な均衡を取ること ができる面積を検討したものである。

計算条件として、温泉の温度は45℃、当該地域の気温は15℃とし、1 源泉当たりの湧出量の全国平均である100L/分(=100,000g/min)を採取したとすると、地下から採取する熱量(Qsとする)は以下の通りとなる。

Qs = $((45 [^{\circ}C] - 15 [^{\circ}C]) \times 100000 [g/min]) / 60$

=50,000 ca 1/sec

一方、地球内部から熱伝導によって運ばれる熱量は、地殻熱流量 (**) と呼ばれる。 日本における地殻熱流量は様々な文献等で公表・紹介されているが、ここでは地質調 査所 (1980) による「日本温泉放熱量分布図」にコンターマップとして表現されてい るので、参照とされたい。

※地殼熱流量($Q: ca1/cm^2 \cdot sec$)とは、地球内部から地表に向かう熱の流れの量を意味する。地表付近ではほとんどの熱伝導で運ばれていると考えられるので、ある場所で地温勾配(dT/dZ、T: 温度、<math>Z:深さ)と熱伝導率 K を測定することで、熱流量は次式により求められる。

 $Q = K \cdot (dT/dZ)$

(新版地学事典:1996による)

なお、1cal は常用的には 1g(\Rightarrow 1mL)の水の温度を 1℃上げるのに必要な熱量を指す。

これによると、我が国の非火山地域における地殻熱流量は $0.5\sim1.5$ HFU(1 HFU は 1×10^{-6} cal/cm²・sec)の範囲にある。仮に、上記の温泉採取地点の地殻熱流量が 1.0 HFU の地域であるとすると、そこで獲得できる熱量(Qe とする)は 1×10^{-6} cal/cm²・sec であり、1 km² 当たりに換算すると 10,000 cal/km²・sec となる。したがって、上記の温泉採取によって奪われる熱量(Qs)を、熱伝導によって運ばれる熱量(Qe)で補填するには、2 Qe=5 km²の面積が必要となる。これは半径 1.26 km の円に相当する。

同様の計算を、いくつかの HFU 値に対応して試算した結果を表 1 に示しておく。

表 1 熱収支による集水必要面積試算例

地殼熱流量	HFU	0.5	1	1.5	2
同上 (単位換算)	cal/cm²∙sec	0.0000005	0.000001	0.0000015	0.000002
同上 (1km ² 当たり)	cal/km²∙sec	5,000	10, 000	15, 000	20, 000
必要面積	km^2	10	5	3.33	2.50
半径	km	1.78	1.26	1.03	0.89

注:温泉の温度は45℃、当該地域の気温は15℃とし、湧出量は100L/分(=100,000g/min) としたので、温泉の熱量は50,000cal/sec となる。

別紙 3

経年的な水位低下について

以下の報告から、箱根カルデラと湯河原カルデラでは、1950 年代後半から 70 年台にかけて著しい水位・温度・成分の低下が生じていたと考えられる。大山 (1984 $^{(*1)}$ 、1985 $^{(*2)}$)は、両カルデラにおける水がそれぞれ閉じた循環系を形成しているとみなし、当時の温泉総採取量と降水量の比を、箱根で 2.3%、湯河原で 5.5%と見積もっている。同報告によれば、カルデラへの平均降水量は箱根で 2,830 $^{\rm mm}$ (108 $^{\rm km}$)、湯河原で 2,200 $^{\rm km}$ (30 $^{\rm km}$)である。一方、1979年度の温泉総湧出量は箱根で約 27,000 L/分、湯河原で約 7,000 L/分 (いずれも神奈川県統計資料による)であり、温泉湧出量が降水量に占める割合は、箱根で 4.6%、湯河原で 5.5%となる。

*1:大山正雄・広田 茂・迫 茂樹・栗屋 徹、1984:湯河原の水位(1982年)、神奈川県 温泉地学研究所報告、第 15 巻、第 5 号、183-191

*2:大山正雄・平野富雄・大木靖衛、1985:箱根の地下水とその利用、神奈川県衛生部

1. 湯河原温泉

① 大山・大木(1974) 湯河原温泉の水位の変遷、神奈川県温泉研究所報告、第6巻、第1号、31-46.

湯河原温泉の沿革を整理するとともに、1900年代初頭から1970年代までの、源泉総数、総湧出量の推移と、静水位の低下についてまとめている。湯河原温泉の開発が顕著だったのは1935~40年頃と、1950年以降の2時期であった。1935年頃の開発により、それまで自噴していた掘抜井戸が動力揚湯への切替えを余儀なくされる事態が発生したが、特に急激な水位低下が始まったのは1950年以降であり、総湧出量は1958年の5,400L/分(利用源泉数67)から、1978年の7,000L/分(利用源泉数103)まで増加している。これに伴う温泉井の水位低下は、1960年までは、温泉の揚湯が集中している地域を中心に水位低下が顕著であったが、その後も続いた温泉の掘削・利用の増加により、水位の低下範囲は湯河原温泉全体に拡大していった。1957年と1972年とで比較すると、水位低下の最大量は中心部で70m以上、周辺部でも40m程度であった。以上の結果から、湯河原温泉の総湧出量は、著しい水位低下が起きる前の毎分4,500~5,000L/分程度が適当であるとしている。

② 平野・粟屋・大山・大木(1976) 湯河原温泉の地下水位低下と温泉の冷地下水化 - こごめ橋周辺の古い源泉の場合-、神奈川県温泉研究所報告、第7巻、第2号、53-68.

湯河原温泉の中心部(こごめ橋周辺)で古くから利用されている源泉について、 井戸の深さ、温泉温度と湧出量、化学組成の推移や揚湯装置の変遷について検討

した。各源泉とも、水位の低下にともない、揚湯装置の設置、増くつ、揚湯能力の強化といった経過をたどることで源泉の維持に努めてきているが、1960年以降は、水位・温度の低下だけでなく、溶存成分の減少、成分比率(C1/SO₄比)の変化が観測されるなど、温泉の冷地下水化(浅層地下水の混入割合増加)が進行していることが明らかになった。

2. 箱根温泉

③大山・伊東・大木(1985) 箱根温泉の温度と湧出量の観測 昭和 57-58 年、神奈川県温泉地学研究所報告、第 16 巻、第 5 号、41-52.

箱根を代表する湯本・塔ノ沢、蛇骨、姥子、芦ノ湯の各温泉地で、温度・湧出量の連続観測を行った結果について検討した。このうち、湯本・塔ノ沢地域では、地域の総温泉湧出量の約8%を湧出する竪穴湧泉において、1958年から1970年にかけて泉温の低下が著しかった。また、蛇骨湧泉では、箱根の火山活動活発化の影響による温度上昇が観測されたものの、1968年以降、湧出量の減少傾向が続いていた。

④大山・久保寺・小鷹・伊東・迫(1985) 箱根火山中央火口丘東麓の温泉水位、神奈川県温泉地学研究所報告、第16巻、第5号、53-62.

箱根中央地区で1978(昭和53)年から行っている観測井の水位観測結果と、過去の水位の記録のある温泉井のデータについて検討し、1960年から1980年にかけての温泉水位の低下速度を、箱根中央部で0.3~0.5m/年、山麓周辺で0.8~1.0 m/年、基盤岩中で0.7~0.8m/年と見積もった。

- ⑤平野・広田・小鷹・粟屋・大木(1976) 箱根搭ノ沢温泉の温度と化学成分、神奈川県温泉研究所報告、第7巻、第2号、85-92.
- ⑥平野・広田・大木(1977) 箱根湯本、下茶屋地区の温泉の湧出量と溶存成分の 減少について、神奈川県温泉研究所報告、第8巻、第2号、51-66.

湯本・塔ノ沢温泉では、温泉総湧出量が、1953 年の毎分 2,810L から、1983 年には、その2倍以上にあたる6,023L/分に増加したのにともない、自然湧泉の枯渇、温泉の水位、温度、湧出量、溶存成分の低下が進行していることを報告している。

別紙 4

温泉採取制限事例

本地域では、掘削当初は大量に自噴する温泉が多くあった。しかし、源泉数及びそれに伴う温泉採取量の増加と共に水位(圧力)が低下し動力揚湯泉が多くなり、資源が急速に衰退していった。そのため、行政により資源動向調査と、モニタリングが行われ、現在は地域の温泉採取量を制限することで水位低下傾向を抑えることに成功している。なお、資源動向調査とモニタリングについては現在も実施されている。

1. 温泉資源動向

本地域の地下構造は平野が1つの大きな構造性の堆積盆を形成しており、層状に貯留された温泉である。浴用以外にもハウス暖房等の農業利用も行われている。

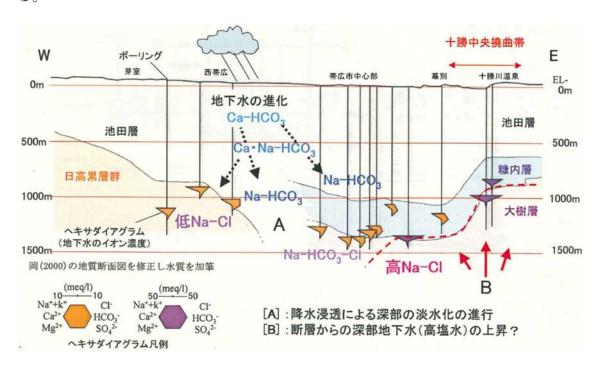


図1 十勝平野の温泉賦存状況 (宮川・馬原, 2005)

帯広市周辺では1960年~1973年にかけて、深度300~600m級のボーリングによる温泉開発が始まった。1974年と1976年には掘削深度850mと935mの掘削が行われ、湧出量600~800L/分、泉温40℃弱の自噴が確認された。これが帯広市付近での本格的な温泉開発の先駆けである。その後は開発ラッシュとなり、1984

年には掘削深度が1617mに達した。温泉の開発は1981年までの開発開始時期、1982~1986年の開発ラッシュ時期、1987~2004年の温泉保護時期、2005年以降の採取制限時期に区分される。1994年時における源泉総数は帯広市内で31源泉、周辺地域で32源泉となっている。温泉開発は1982年~1986年の5年間に集中している(図2参照)。

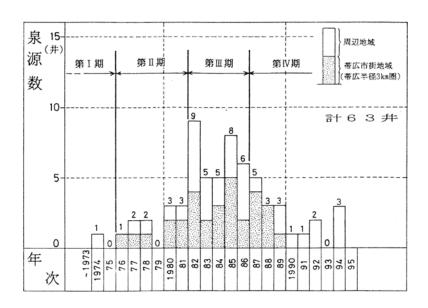


図2 掘削深度800m以上の源泉数の推移

水位変動に関しては長期に渡る詳細な水位モニタリングデータが存在し、温泉地総採取量と水位の関係は図3に示される。

帯広市内地域の総湧出量は、1982年に4056L/分であった。その後は増加し、1984年には9156L/分のピークに達したが、それ以降は、動力泉数が増えるとともに湧出量は減少傾向となる。1992年以降はほぼ6000/分前後で横ばい状態となっている。現在では自噴泉数とその湧出量は少なくなりほとんどの源泉が動力による揚湯を行っている。

自然水位分布は、1980年代に著しい低下を示している。各観測源泉では、1987年以後の保護地域設定が行われるまでにおおよそ20m以上にも及ぶ著しい低下が認められる。その後の1990年代に入ってからは、保護地域・準保護地域指定により一時的に水位の低下傾向が緩やかとなるも1990年代後半からは保護地域(帯広市)周辺地域での掘削が増加したため再び低下傾向を示すこととなる。近年は、準保護地域の拡大とともに、保護地域は1源泉あたりの揚湯量を最大150L/分、準保護地域は300L/分に制限したことによる効果で徐々に低下速度が緩やかとなっている。

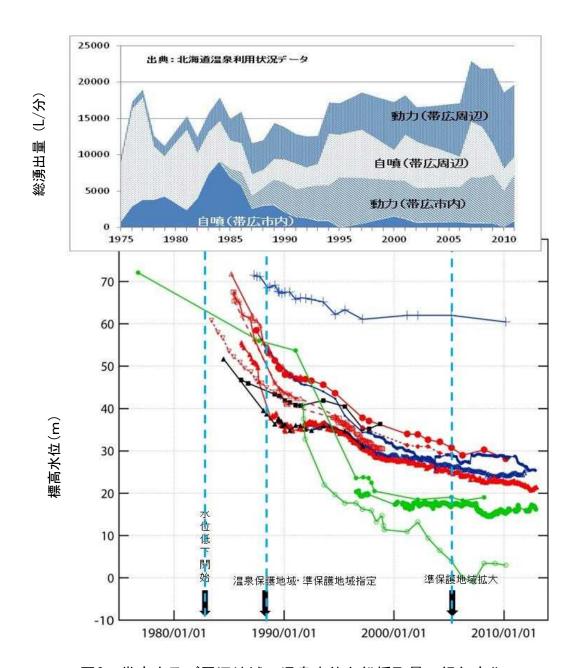


図3 帯広市及び周辺地域の温泉水位と総採取量の経年変化

2. 当地域における温泉賦存状況とこれまでの行政対応

温泉の量的評価を行う場合、温泉胚胎層に流入する量と流出する量のバランスを考える必要がある。バランスが崩れると地下水位の変動となって現れ、各源泉間の相互干渉などを発生させる原因となる。

道は、1985年以降地域の温泉資源が衰退を示したことから、源泉群全体が互いに影響しあう相互干渉状態を示すものと判断した。1986年12月より帯広市街地域について、温泉保護対策を実施し、引き続き監視を強めるとともに水位観

測等のモニタリングを開始した。1988年12月からは帯広市街地域を保護地域(原則として、新規掘削を禁止等)、隣接する西帯広地域については、準保護地域の措置(制限距離500m内は原則として新規掘削を禁止等)がとられている。

その結果、水位については帯広市街では、1983、1984年に年間5mの低下を記録した後は、徐々に緩やかな低下傾向となり1988年には同2m、1991~1994年には同0.5m程度でほぼ横ばい状態となり、保護対策の効果が現れている。

ただし、現在でも水位低下は続いており、安定した状態には見えない。した がって、当地域の温泉採取量は賦存量よりも上回っていると考えられる。

> 昭和51年 十勝川温泉保護地域指定 昭和63年 帯広市中心部保護地域 西帯広準保護地域指定 平成17年 音更町、幕別町温泉保護地域指定

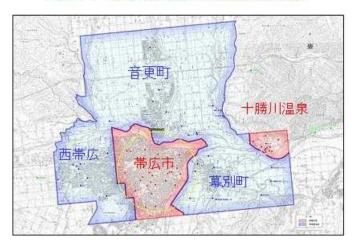


図4 保護地域の設定区域

3. 引用文献

北海道立地下資源調査所(1995)地質資源調査所ニュース 北海道立地下資源調査所広報誌, vol. 11, No4.

宮川公雄・馬原保典(2005):地下水流動における断層破砕帯影響評価手法-地下水化学的調査の適用と系統的評価手段の提案-.電力中央研究所報告, No4039, 26p.

表1 帯広市を中心とした温泉開発の変遷と資源動向及び行政対応

行政の取り組み		1980年頃から地元自治体等で深層熱水への関心が高まり、調査掘削等が行われる。	1982年頃から帯広市内での水位低下・資源枯渇問題について道衛生部・温泉審議会での検討を開始。1986年12月より、市内中心部半径3km圏について準保護地域に指定する。	1987年7月、市の温泉保護対策 懇話会発足、1988年12月より市 中心部を保護地域指定、隣接する西地域について準保護地域指 定が行われる。	2005年5月より準保護地域が拡大、保護地域は1源泉当たりの 場場量を最大150L/分以内、準保護地域は300L/分以内に制限する。
資源動向モニタリングの 取り組み	開発当初から現在まで、地質研究所(地下資源調査所)は資源状況のモニタリングを様々な形で継続		1986年5月、1源泉で水位のモニタリングを開始	1987年10月、1源泉で水位測定開始。1987年12月衛生部、温泉保護対策調査開始(薬務課・帯広保健所、地下資源調査所共同)、1988年10月以後、市で2源泉水位測定開始、以降2源泉でも水位の測定が始まる。1992年6月には地下資源調査所、1源泉で水位測定を開始する。	現在のモニタリング体制、道保健福祉部が中心となり、毎年1~2回、湧出量、泉温、水位等の現地調査を実施している。連続モニタリングに関しては、温泉水位観測4箇所、泉温は3箇所、他地下水井3箇所で水位観測も行われている。
資源状況	~40℃の温泉が大量自噴(毎分数千リットル規模)	開発深度1000m前後で40~48℃ の温泉が大量自噴(毎分数千 リットル規模)	開発深度は最深1600mに達する ようになり、掘削当初は大量に 自噴する。最高温度は58℃を示 した。その後、自噴量は徐々に 減少し、既存源泉は徐々に休位 低下した。	自噴源泉の自噴量は減少し動力 揚湯への切り替え、水位低下が 継続する。保護対策施行後、一 時的に水位低下の鈍化傾向が現 れたが1996年頃から再び水位低 下率が大きくなる。	化石燃料価格の高騰等により、 温泉熱利用が積極的に行われて いる地区もあり、汲み上げ量は 減っていないようである。
開発動向	1970年頃から1000m位浅の開発 が行われる。	帯広市内で本格的な温泉開発が始まり、計11源泉が掘削される。	帯広市内及び周辺地域での開発 ラッシュ。計33源泉の掘削が行 われる。	1988年の保護対策施行後は開発 地域が保護地域・準保護地域に 隣接する場所で活発に開発が行 われるようになった。1996年ま でに11源泉の開発が行われた。	2004年以降は、準保護地域で若干掘削されているが、源泉総数はほとんど増加していない。
年代	~1975年	1976~1981年	1982~1986年	1987~2003年	2004年~

別紙5

動力装置の際の影響調査実施手法及び揚湯試験実施手法

I 影響調査

1. 観測源泉の選定

動力の装置が「温泉のゆう出量、温度又は成分に影響を及ぼす」か否かを判断する ため、動力を装置しようとする源泉(以下「対象源泉」)の周辺の既存源泉を「観測 源泉」として捉え、当該観測源泉における影響の程度を調査する。

観測源泉の選定に当たっては、対象源泉からの距離、温泉採取深度、地質の構造、 泉質の類似性等を考慮した上での位置関係、予測される影響範囲、測定の難易度等を 考慮して、抽出することが適当である。なお、観測源泉数については、地域の特性や 予想される影響の範囲を考慮し、設定すべきと考える。

2. 測定項目

2-1 観測源泉

源泉間の影響関係でもっとも鋭敏に反応するのは水位(自噴の場合には湧出量と 孔口圧力(静止水頭))であり、温泉の温度や成分等への影響は、一般的に上記の項 目の次いで変化が現れる項目である。

このため、影響調査で必須の測定項目は、水位(自噴では孔口圧力)、湧出量、 次いで温度である。温泉法に基づく温泉成分分析は状況に応じて適宜測定すべき項 目となるが、観測源泉の温度や成分濃度の変化が問題となることが予測される場合 は、重要な成分項目を把握することが必要となる。なお、主要な成分分析のほかに、 電気伝導率の測定による確認が簡易的な状況把握の方法として挙げられる。

2-2 対象源泉

対象源泉においても、観測源泉との影響関係を検討するために、原則として観測源泉と同一の項目を測定する必要がある。

3. 測定に使用する機器

測定に使用する機器は例として以下のような機器があり、現場の状況に応じて、自動記録方式、機器の指示値の読み取り、現地測定を組み合わせた測定態勢を取ること

になる。電気伝導率は携帯型測定器を用いて測定することが可能である。

なお、観測源泉において、これらの機器の設置ができない場合、あるいは複数の項目が測定困難な場合は、測定可能な項目をもって影響の有無を判断せざるをえない。 しかし、水位、湧出量がともに測定できない場合は、観測源泉としては不向きであるので別の周辺源泉を観測源泉とする等の対応も考えられる。なお、他に測定に適した源泉が存在しない場合は、単一井(対象源泉のみ)による影響調査を行うことも考えられる。

3-1 機器による測定

測定項目	主な機種等	規格
水位	圧力式等	±0.1% FS (フルスケール) 程度
湧出量	電磁式等	±2%指示値
孔口圧力	圧力発信器等	測定精度±1% FS
温度	測温抵抗体等	分解能 0.1℃
記録方式	アナログ記録、デジタル記録、表示値の読	連続記録、定時での記録
	み取り等	

3-2 観測員による定時測定

測定項目	主な機種等	測定
水位	触針式(ロープ式)等	1cm 単位以下で読み取り
湧出量	容積法、ノッチ法等	L/分単位で有効数字三桁程度
孔口圧力	ブルドン管式等(測定精度±1.6% FS 程度)	機器の指示値
温度	デジタル温度計等 (分解能 0.1℃) と標準温	0.1℃単位で現地測定
	度計の併用	
記録方式	_	現地測定・記録

4. 影響調査の実施期間

影響調査に当たっては、対象源泉を揚湯しない状態での測定(事前調査)、対象源泉を揚湯した状態での測定(本調査)、対象源泉の揚湯を停止後における状態での測定(事後調査)の3つの期間を設定する。以下に実施期間の目処を記すが、温泉の採取層の特性や実情(距離、地質の構造、採取深度等)により、必要とされる日数は、大きく変わることに留意し、影響による変動が継続し安定しない等、影響の程度を把握することが困難な場合は、調査期間を延長する、もしくは対象源泉の採取量を変更する等の対応が必要とされる。

4-1 事前調査

観測源泉の通常期(対象源泉による揚湯が行われていない状態)の湧出状況を把握するためのものである。測定に必要とする期間は源泉の特性によるが、変動が少なく安定している源泉であれば3日間程度を目処とする。変動が大きい場合には、調査前の状況を詳細に把握するために、より長い期間を要することに留意する。この調査期間の測定内容は以下の通りとする(重要な項目から順に記す)。

a)対象源泉での測定

水位 (静水位)

b) 観測源泉での測定

揚湯の場合:水位(静水位、動水位)、湧出量、温度、

その他 (電気伝導率、重要な成分項目の分析等)

自噴の場合: 孔口圧力 (静止水頭)、湧出量、温度、

その他(電気伝導率、重要な成分項目の分析等)

4-2 本調査(1段階で1日程度、5段階を目処)

観測源泉において、対象源泉の湧出量に応じた影響の有無とその程度を確認するため、対象源泉の湧出量を段階的に増加する方式を推奨する。湧出量の設定は、動力揚湯の場合、下限は使用するポンプで制限可能な最小揚湯量、上限は採取制限量が定められている場合には許可制限量、もしくは対象源泉の適正揚湯量又は計画採取量とし、5段階程度に区分する。1段階の揚湯期間は1日程度を目安とするが、最終的な影響の程度の確認が重要となるので状況により調整する。この間での揚湯時間(例えば、終日運転か昼間のみの運転か等)については、温泉の採取状況等を勘案して決定する。

対象源泉の5段階以上の揚湯量の設定が困難な場合は、状況に応じて段階を設定することとし、調査期間はその段階設定に対応することになる。

なお、この調査期間の測定内容は以下の通りとする(対象源泉・観測源泉ともに 共通であり、重要な項目から順に記す)。

- ・水位(自噴の場合は孔口圧力(静止水頭))
- 湧出量
- 温度
- その他(電気伝導率、重要な成分項目の分析等)

4-3 事後調査

影響調査時に出現した変動が対象源泉によるものか否か(影響要因となるか否か)を再確認するものであり、対象源泉揚湯停止後の変動を測定する。測定に必要とする期間は源泉の特性により異なるが、本調査の結果を目処に判断する(3日間程度を目処)。本調査時に明確な変動がなければ、事後調査の実施は省略することもできる。この調査期間の測定内容は以下の通りとする(重要な項目から順に記す)。

a)対象源泉での測定

水位 (静水位)

b) 観測源泉での測定

揚湯の場合:水位(静水位、動水位)、湧出量、温度、その他(電気伝導率、

重要な成分項目の分析等)

自噴の場合:湧出量又は孔口圧力(静止水頭)、温度、その他(電気伝導率、

重要な成分項目の分析等)

5. 測定方法

5-1 自動記録

アナログ記録計(ペン式又は打点式)では連続記録、自動記録計による場合のデータサンプリング間隔は10分程度を目安とし、前者の場合は連続記録をそのまま図化するかもしくは10分間隔程度でデータを読み取る。

5-2 観測員による定時測定

a) 水位又は孔口圧力 (静止水頭) (対象源泉・観測源泉ともに共通)

対象源泉の揚湯開始又は停止を起点として、最初は短い間隔で測定し、変動が小さくなるに従い徐々に測定間隔を長くすることが考えられる。測定例を以下に示す。

《測定例》

経過時間 測定測間隔

0 ~30分 : 1~5分

30 ~60分 : 5~10分

60 ~120 分 : 10~30 分

120分~: 30~60分(より長期の場合も60分を目処とする)

b) 湧出量・温度(対象源泉・観測源泉ともに共通)

原則60分間隔を目安とする。

c)上記の実施が困難な場合

夜間の観測員による定時測定が場所や利用状態によっては困難となることもある。そのため、測定間隔は柔軟に対処し、これに応じて測定の実施期間も変更すべきである。

5-3 影響調査時の観測源泉の状態

影響調査時の観測源泉は、未利用休止状態で水位(静水位)や孔口圧力(静止水頭)を測定するのが理想であるが、実際は温泉を利用しているために水位等の測定が困難なケースが多い。利用している源泉では、長期にわたり揚湯(自噴)を休止することは困難であるので、影響調査期間中は観測源泉および周辺源泉の揚湯(自噴)状態をできる限り一定とすることが望ましい。

特に間欠的な揚湯を行っている源泉の場合は、対象源泉の影響を誤認しないように、調査期間中はできれば一定の揚湯状態を維持すること。これが実現困難な場合は、通常状態における運転状況を観察・記録し、その影響の程度を把握することが考えられる。

6. その他特記事項

6-1 関連データの収集

一般的に浅深度で湧出する温泉は、降水量や潮汐等の自然的要因を含む周辺環境の影響を受け、常に変化するものである。影響調査時には、直近の気象観測点の気象データ(降水量、気温、気圧等)とともに、付近の河川水位や潮位等のデータも収集・整理し参考とする(国土交通省、気象庁等の公表データ等を活用する)。

また、温泉の湧出状況は、地下水位の影響も受けていることがある。源泉分布域の中に水井戸が存在していることが確認できる場合、その揚水量や揚水時間、水位等を測定して参考資料とすることも考えられる。大深度掘削泉の場合は、事前調査の状況から上記した項目から必要な資料を判断する。

6-2 測定間隔や揚湯期間の変更

対象源泉、観測源泉の水位は、揚湯後速やかに安定する場合と、安定しない場合 とがある。影響調査での揚湯期間は1段階につき1日程度としたが、早期に水位が

安定する場合は、これよりも短い揚湯期間で影響判断が可能なこともある。一方で、水位が低下し続け安定しない場合は、揚湯期間を延長する必要もあり得る。要は、 状況に応じた適切な方法を採用し、影響量を確認することが重要であり、測定間隔 をより短くしたり、測定期間をより長くしたりすることは差し支えない。

6-3 調査の協力が得られない場合について

既存源泉所有者等にとっては、温泉資源への影響調査を通じて、源泉の健全性や 異常の有無等により、自己が所有する源泉の状態把握や井戸の適切な維持・管理が 可能となる。また併せて、将来、近傍で新たな温泉掘削等が行われる場合において、 当該温泉掘削等により所有源泉に影響が生じた際の科学的根拠となる貴重なデータ ともなる。

なお、既存源泉所有者は調査に協力しない場合に、所有源泉に何らかの影響が生じたことを主張する際には、源泉所有者自身が影響関係を科学的に証明しなければならないこともある。影響調査に関する趣旨の説明は、事前に周知するほか、都道府県が既存源泉所有者に協力を依頼する際に個々に説明を実施する方法も考えられる。どうしても協力が得られない場合は、例えば揚湯試験結果から単一井による推定を行ったり、他源泉への影響量から推定する等、他の方法により推定を行うことも可能であると考えられる。なお、既存源泉所有者は可能な限り協力することが重要であり、所有源泉をはじめとする地域の温泉資源保護のためにも、こうした協力は源泉所有者に求められることである。

Ⅱ 揚湯試験(集湯能力調査)

1. 揚湯試験の種類と目的

段階揚湯試験による限界揚湯量とその結果から判断する当該井戸の能力評価の適正揚湯量の検討は、その後の連続揚湯試験での設定揚湯量を調べるための調査であり、連続揚湯試験により過度な水位低下を招くことのない水位の安定を確認し、持続的に安定して採取できる温泉の量に調整することで、温泉資源の保護を図ることが主目的である。ただし、個々の源泉における揚湯試験で適正と判断した適正揚湯量の総計が、必ずしも地域の適正揚湯量ではなく、過大となることがあることにも注意が必要である。そのため、適正揚湯量の検討には、揚湯試験結果だけではなく前述した影響調査結果やモニタリングによる資源動向も考慮しての判断が必要とされることもある。

1-1 予備揚湯試験

孔内洗浄の後、実際にポンプを使用して揚湯を行って揚湯量と水位との関係を確認し、段階揚湯試験等の計画を立てるための基礎資料を得るのが予備揚湯試験である。調査期間は1日程度を目処とする。このため予備揚湯試験の結果を踏まえて、段階揚湯試験、連続揚湯試験においては、それぞれの試験に適合する能力のポンプを準備する必要がある。なお、孔内洗浄が不十分であったり、試験の条件に適合しないポンプでは揚湯試験が適切に行えない場合もある。

1-2 段階揚湯試験

この試験は、揚湯量を段階的に変えて、その段階ごとの揚湯量と水位(水位降下量)との関係の調査であり、5段階以上で実施することを基本とする。設定する最大揚湯量は、湧出量に関する採取制限量が定められている場合にはその制限量を、採取制限量が定められていない場合は使用するポンプの能力又はその源泉から採取可能な量とし、最小揚湯量は使用するポンプで制限可能な量とする。

1段階の揚湯時間は、最低1時間とするが、調査時間を延長しても水位が安定しない場合は、おおよその水位の安定をもって次の段階に移行せざるを得ない場合もある。なお、採取可能な量が少ないときは、その採取量の範囲内で可能な段階を設定するものとし、さらに少なければ、次の連続揚湯試験のみを実施することになる。

1-3 連続揚湯試験

段階揚湯試験で得られたデータを基に、湧出量に関する採取制限量が定められている場合では、その制限量の範囲内で、試験実施者がその源泉で適正と算出した量又は将来的に採取することになる計画採取量に設定して、一定の量で長期間の揚湯を行う試験である。この試験の所要日数は、水位が安定化するまでを基本とし、3~7日間程度を目処に安定を確認する。

揚湯変動試験におけるおおよその安定の目安は段階揚湯試験では、1 時間当たりの水位変動量が全体水位変動量のおおむね 0.2%以内となるまでとする。連続揚湯試験では、6 時間当たりの水位変化量が全体水位変化量のおおむね 0.2%以内となるまでを目安とする。なお、平成 21 年 3 月策定のガイドラインでは、全体水位変化量の 0.1%以内と示していたが、温泉では一般的な地下水と異なり様々なケースが考えられるため目安を 0.2%以内と変更した。ただし、こういった数値は目安(目標値)であり、ガスを多く含むような温泉ではどうしても安定しないこともある。また、0.2%以内でも継続的に水位が低下しているような場合は、完全に安定しているとは言えないこともあり、水位が安定しない場合は、試験期間を延長したり、使用する機器の精度や温泉の特性、水位変化の様相も考慮しての総合的な判断が重要である。

1-4 回復試験

連続揚湯試験から引き続く試験であり、揚湯を停止した後の水位回復状況を測定するものである。測定期間は1日以上とする。

2. 揚湯試験の測定項目と測定方法

揚湯試験で測定すべき項目と測定間隔は、「I 影響調査 5.測定方法 5-2 観測員による定時測定」と同様に実施すること。

3. 揚湯試験の測定機器

揚湯試験に使用する測定機器は、「I影響調査」の項で記した測定機器を援用すること。

4. 揚湯試験の測定期間

対象源泉の水位は、試験開始後速やかに安定する場合と、安定しない場合とがある。 速やかに水位が安定する場合は、上記に示したよりも短い揚湯期間で影響判断が可能 なこともある。一方で水位が安定しない場合は、揚湯期間を延長する必要もあり得る。

5. 特殊な事例

揚湯に伴い水位が上昇する、湧出量が少なく上記した通常の揚湯試験が行えないなどの特殊事例については、水位が安定する適正揚湯量を何らかの方法で判断する必要がある。参考までに事例について別紙 12Ⅱ及びⅢに紹介する。

6. 揚湯試験実施要領事例

都道府県によっては揚湯試験に関する実施要領を作成し申請手続きの円滑化を図っているところがある。以下に、神奈川県小田原保健福祉事務所の例を揚湯試験実施 要領と記載例の抜粋を紹介する。

揚湯試験実施要領

1 目的

源泉の適正揚湯量を把握して、温泉資源の保護を図ることを目的とする。

2 実施方法

揚湯試験は、段階揚湯試験、連続揚湯試験及び水位回復試験とし、この順で実施する。

(1) 測定値の記述について

泉温(℃):小数点以下第1位まで測定する。

水位(m):地表面を基準とし、小数点以下第2位まで測定する。

揚湯量 (L/分) : 整数で表示する。

(2) 揚湯試験を行う前に、事前準備として孔内洗浄及び予備揚湯を行い、動力や 源泉井戸の揚湯特性の概要を把握する。

(3) 段階揚湯試験

- ① 自然水位(揚湯していない状態での水位)を測定する。自噴泉の場合も可能な限り測定する。
- ア 自噴していない源泉の場合 動力を用いて揚湯している温泉などは温泉水頭が地表下に位置しているの で、その静水位を測定して自然水位とする。
- イ 自噴している源泉の場合 自噴状態の泉温及び湧出量を測定する。測定後、湧出口を地表よりも高くし

ていくと自噴量が減少し、ある高さになると全く停止する。このときの高さ を自然水位とする。

- ② 5段階以上の揚湯量を決定する。利用計画に基づいた必要な揚湯量を基準にして、それよりも少ない揚湯量、多い揚湯量をそれぞれ2~3段階設定する。あるいは揚湯試験に用いる動力装置による最大揚湯可能量を5等分して基準にする方法などがある。
- ③ ②で設定した揚湯量について、最小揚湯量から順に各段階の揚湯量で継続して揚湯しながら、時間の経過と共に動水位及び水温の変化を測定する。各段階の試験は動水位が安定するまで(目安としては水位の低下速度が1時間に0.1m以下となるまで)行う。
- ④ 測定により得られた結果から、各段階における揚湯量(Q)を横軸に、自然水位からの水位降下量(S)を縦軸に取った揚湯量一水位降下量図(Q-S 図)を作成する。揚湯量一水位降下量図は両対数グラフで作成し、縦軸と横軸の目盛りは等倍であることが望ましい。
- ⑤ 揚湯量-水位降下量図において、揚湯量と水位降下量の関係を示す線が、両対数グラフの対角線(傾き1の直線)よりも急になる最初の点の揚湯量が限界揚湯量となり、その80%を適正揚湯量とする。揚湯量-水位降下量図により限界揚湯量が見出せない場合、段階揚湯試験を実施した最大の揚湯量を限界揚湯量とみなすこととする。

(4) 連続揚湯試験

段階揚湯試験により設定した適正揚湯量で連続して揚湯し、時間の経過と共に動水位及び泉温の変化を測定する。連続揚湯試験は動水位が安定するまで(水位の低下速度が1時間に0.1m以下となるまで)行う。

(5) 水位回復試験

連続揚湯試験の終了と共に揚湯を停止し、時間と共に水位、温度がどのように回復するかを測定する。水位が自然水位まで回復し、安定(水位の上昇速度が1時間に0.1m以下となるまで)した時点で終了する。

3 結果のまとめ

揚湯試験の結果は以下のように整理する。 (2) \sim (4) については記載例を参考に作成すること。

(1) 揚湯試験結果表

(別紙①)

(2) 段階揚湯試験結果

(記載例1-1、1-2)

- (3) 連続揚湯試験・水位回復試験結果 (記載例2)
- (4) 揚湯量-水位降下量図(Q-S図) (記載例3)

4 その他

- (1) 上記の規定により試験を実施することが困難な場合は、個別に指導するものとする。
- (2) 試験においては排水、騒音など周辺環境に配慮して行うこと。
- (3) 水位、温度の測定間隔の目安

各試験の測定時間の間隔は、開始直後はできるだけ細かく測定し、間隔を開けるのは水位の変化が緩やかになってからにすること。

例) 開始後10分までは1分間隔、10分から30分までは5分間隔、30分から60分までは10分間隔、60分以降は30分、60分間隔など。

(別紙①)

揚湯試験結果表

試験実力	験 施 日		年	月	日 ~	年	月	日
試製	験	住所				TEL		_
実力	施者	氏名				(担当者氏名:)
源,	泉	住所				TEL		_1
所2	有者	名称						
源	所在地							
泉	名 称							
水	深度		m	掘削口径	mm	水止め位置		m
	カの カ, 形式							
				試	験 結	果		
	区分	揚湯 (L /		動水位 GL-(m)	水位降下量 (m)	泉温 (℃)	揚湯時間 (分)	備考
自名	然水位							
第	1 段階							
第	2 段階							
第	3 段階							
第	4 段階							
第	5 段階							
連絡湯	続 湯試験							

(記載例1-1)

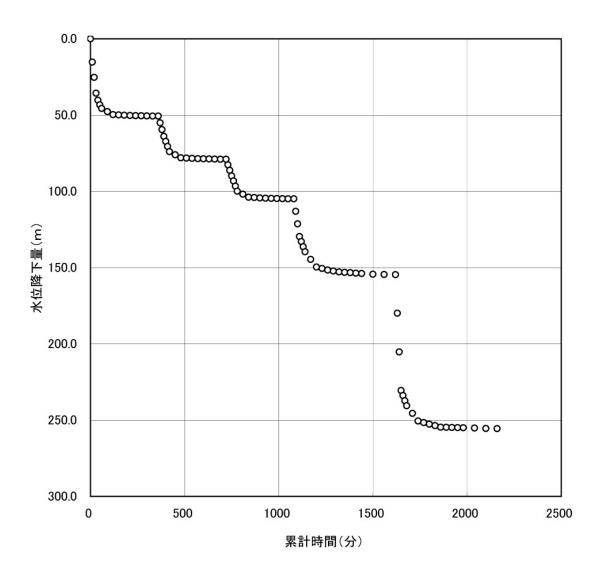
段階揚湯試験結果

						(平原
時間	累計時間	水位	水位 降下量	泉温	揚湯量	
(分)	(分)	(m)	(m)	(°C)	(L/分)	
0	0	77.7	0.0	(- /	0	
10	10	93.0	15.3		50	
20	20	103.0	25.3		50	
30	30	113.4	35.7		50	
40	40	118.0	40.3		50	
50	50	121.0	43.3		50	
60	60	123.4	45.7		50	
90	90	125.4	47.7		50	
120	120	127.4	49.7		50	
150	150	127.6	49.9		50	
180	180	127.8	50.1	27.8	50	
210	210	128.0	50.3		50	
240	240	128.1	50.4		50	
270	270	128.2	50.5		50	
300	300	128.3	50.6		50	
330	330	128.4	50.7		50	
360	360	128.4	50.7	28.0	50	
10	370	132.8	55.1		80	
20	380	137.2	59.5		80	
30	390	141.7	64.0		80	
40	400	145.0	67.3		80	
50	410	148.3	70.6		80	
60	420	151.7	74.0		80	
90	450	153.7	76.0		80	
120	480	155.7	78.0		80	
150	510	155.9	78.2		80	
180	540	156.1	78.4	28.3	80	
210	570	156.3	78.6		80	
240	600	156.4	78.7		80	
270	630	156.5	78.8		80	
300	660	156.6	78.9		80	
330	690	156.7	79.0	2012-000-000-0	80	
360	720	156.7	79.0	28.5	80	
10	730	160.3	82.6		110	
20	740	163.9	86.2		110	
30	750	167.6	89.9		110	
40	760	170.9	93.2		110	
50	770	174.3	96.6		110	
60	780	177.6	99.9		110	
90	810	179.6	101.9		110	
120	840	181.6	103.9		110	
150	870	181.8	104.1		110	
180	900	182.0	104.3	29.3	110	
210	930	182.2	104.5		110	
240	960	182.3	104.6		110	
270	990	182.4	104.7		110	
300	1020	182.5	104.8		110	
330	1050	182.6	104.9	00 =	110	
360	1080	182.6	104.9	29.5	110	

年	月	日 ~ 平		月	日)
時間	累計時間	水位	水位 降下量	泉温	揚湯量
(分)	(分)	(m)	(m)	(°C)	(L/分)
10	1090	190.8	113.1		130
20	1100	199.0	121.3		130
30	1110	207.3	129.6		130
40	1120	210.6	132.9		130
50	1130	214.0	136.3		130
60	1140	217.3	139.6		130
90	1170	222.3	144.6		130
120	1200	227.3	149.6		130
150	1230	228.3	150.6		130
180	1260	229.3	151.6	31.2	130
210	1290	230.0	152.3		130
240	1320	230.5	152.8		130
270	1350	230.8	153.1		130
300	1380	231.0	153.3		130
330	1410	231.4	153.7		130
360	1440	231.6	153.9	31.3	130
420	1500	232.0	154.3		130
480	1560	232.2	154.5		130
540	1620	232.3	154.6	31.5	130
10	1630	257.6	179.9		160
20	1640	283.0	205.3		160
30	1650	308.3	230.6		160
40	1660	311.6	233.9		160
50	1670	315.0	237.3		160
60	1680	318.3	240.6		160
90	1710	323.3	245.6		160
120	1740	328.3	250.6		160
150	1770	329.3	251.6		160
180	1800	330.3	252.6	33.5	160
210	1830	331.3	253.6		160
240	1860	332.3	254.6		160
270	1890	332.4	254.7		160
300	1920	332.5	254.8		160
330	1950	332.6	254.9		160
360	1980	332.7	255.0	33.6	160
420	2040	332.9	255.2		160
480	2100	333.2	255.5		160
540	2160	333.3	255.6	33.8	160

(記載例1-2)

段階揚湯試験結果



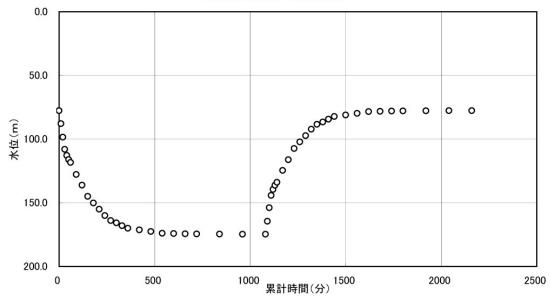
(記載例2)

連続揚湯試験・水位回復試験結果

						(平成
時間	累計時間	水位	水位 降下量	泉温	揚湯量	
(分)	(分)	(m)	(m)	(°C)	(L/分)	
0	0	77.7	0.0		100]
10	10	87.9	10.2		100]
20	20	98.5	20.8		100	
30	30	108.1	30.4		100	
40	40	112.8	35.1		100	
50	50	116.1	38.4		100	
60	60	118.4	40.7		100	
90	90	127.8	50.1		100	
120	120	136.2	58.5		100	
150	150	145.0	67.3		100	
180	180	150.2	72.5	28.8	100	
210	210	155.1	77.4		100	
240	240	160.1	82.4		100	
270	270	164.0	86.3		100	
300	300	165.8	88.1		100	
330	330	168.0	90.3		100	
360	360	170.1	92.4	29.0	100	
420	420	171.3	93.6		100	
480	480	172.6	94.9		100	
540	540	174.0	96.3		100	
600	600	174.2	96.5		100	
660	660	174.4	96.7		100	
720	720	174.5	96.8		100	
840	840	174.6	96.9		100	
960	960	174.7	97.0		100	
1080	1080	174.7	97.0	29.1	100	

100	年	月	日~平		F 月	日)
	時間	累計時間	水位	水位 降下量	泉温	揚湯量
١	(分)	(分)	(m)	(m)	(°C)	(L/分)
Ī	10	1090	164.5	86.8		-8
١	20	1100	153.9	76.2		-1
١	30	1110	144.3	66.6		_1
١	40	1120	139.6	61.9		
١	50	1130	136.3	58.6		-,;
١	60	1140	134.0	56.3		-9
١	90	1170	124.6	46.9		-
١	120	1200	116.2	38.5		-1
١	150	1230	107.4	29.7		-1
١	180	1260	102.2	24.5		-0
١	210	1290	97.3	19.6		
١	240	1320	92.3	14.6		-1
١	270	1350	88.4	10.7		-1
١	300	1380	86.6	8.9		-
١	330	1410	84.4	6.7		-,:
١	360	1440	82.3	4.6		-0
١	420	1500	81.1	3.4		-8
١	480	1560	79.8	2.1		-1
١	540	1620	78.4	0.7		
١	600	1680	78.2	0.5		
١	660	1740	78.0	0.3		:
	720	1800	77.9	0.2		-1
	840	1920	77.8	0.1		-0
	960	2040	77.7	0.0		-11
	1080	2160	77.7	0.0		-





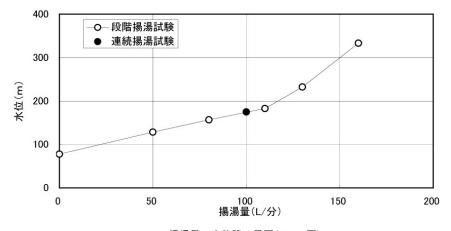
(記載例3)

揚湯量一水位降下量図

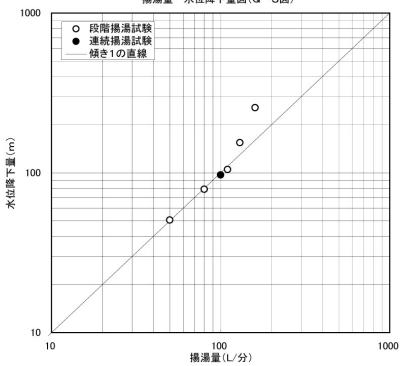
段階揚湯試験結果

权阳扬杨武松和木						
揚湯量	水位	水位降下量	経過時間	泉温		
(L/分)	(m)	(m)	(分)	(°C)		
0	77.7	-	-	-		
50	128.4	50.7	360	28.0		
80	156.7	79.0	360	28.5		
110	182.6	104.9	360	29.5		
130	232.3	154.6	540	31.5		
160	333.3	255.6	540	33.8		

連続揚湯試験 結果								
揚湯量 水位 (L/分) (m)		水位降下量	経過時間	泉温 (℃)				
		(m)	(分)					
0	77.7	-	_	-				
100	174.7	97.0	1080	29.1				



揚湯量-水位降下量図(Q-S図)



揚湯試験実施要領

http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/2985.pdf 揚湯試験実施要領記載例

http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/2986.pdf (2011年3月31日更新)

別紙 6

影響調査事例

|I 掘削深度の浅い温泉での事例

1. 影響調査の背景および源泉状況

別府温泉の事例を紹介する。各源泉の掘削深度はおおむね 100~200mであり、狭い範囲に数多く分布している。当時、別府温泉及びその周辺では揚湯泉の増加と共に自噴泉の数や湧出量が減じたことから揚湯に伴う既存源泉への影響調査が数多く行われている。ここでは、昭和 43 年から 44 年に北石垣地区と鉄輪地区で実施された調査結果事例の一部を抜粋する。

2. 調査の方法

ある源泉で揚湯を行い、揚湯源泉から半径 100m 以内にある既存源泉の水位変化、湧出量変化を測定している(図中の円の半径は 100m)。

当時は、自噴源泉数が減少し、代わりにエアリフトポンプによる揚湯泉が増加していた。影響調査中に周辺で不定期的な揚湯があれば、その影響が測定結果に現れて解析を困難にするおそれがあるため、温泉が揚湯停止状態にあると考えられる9時から17時の間を選び、揚湯源泉から半径100m以内の温泉は停止状態にあることを確かめて調査が行われている。

3.調査の結果

3-1. 北石垣地区温泉

No. 1064 源泉の揚湯試験では、No. 1064 の 50L/分程度の揚湯開始及び揚湯停止に伴って、No. 1077、No. 1065、No. 1063 源泉に水位の低下と回復という反応が認められたが、揚湯源泉に最も近い No. 1062 では明確な反応が認められなかった(図 1)。これは、No. 1062 源泉はケーシング管が傷んでおり、泉温も他の温泉に比べ低いことから、浅い層からも温泉水を採取していることが考えられる。

3-2. 鉄輪地区温泉

No237 源泉の揚湯試験では、No.237 の 40L/分程度の揚湯開始及び揚湯停止 に伴い、白垣、河野、原、林田源泉には、水位の低下と回復という反応が認

められる。一方、揚湯源泉の北東方向に位置する No221 の湧出量の変動は不明瞭なものとなっており、影響量は小さいことが伺える(図3)。

4. まとめ

影響による水位低下量は、揚湯泉に近いほど大きい傾向があるが、方向性が認められ、中には揚湯泉よりも離れている場所でかえって大きい水位低下量が現れていることもある。このような結果は、測定法の問題もあるかもしれないが、各源泉の採取層の違いや、地質構造の不均一性などにも由来するところが大きいと考えられる。

5. 引用文献

山下幸三郎・由佐悠紀(1969)別府温泉の源泉保護について(Ⅲ)北石垣、鉄輪地区温泉の揚水影響,大分県温泉調査研究会報告,209-32.

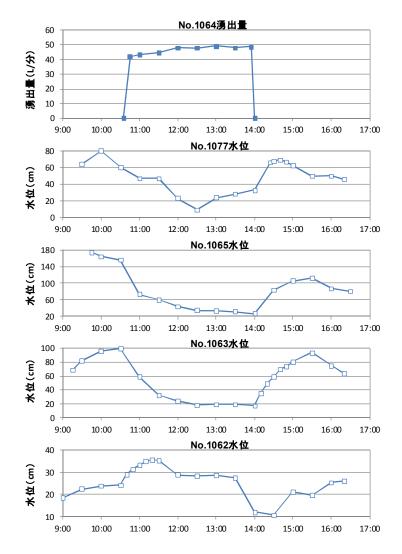


図1 北石垣 No.1064の揚湯に伴う周辺温泉水位変化

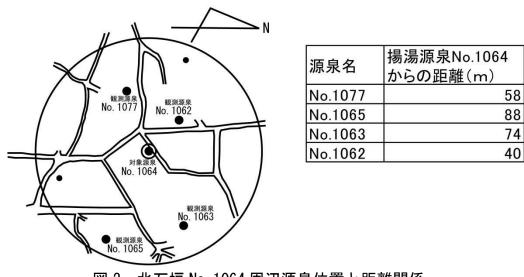


図2 北石垣 No. 1064 周辺源泉位置と距離関係

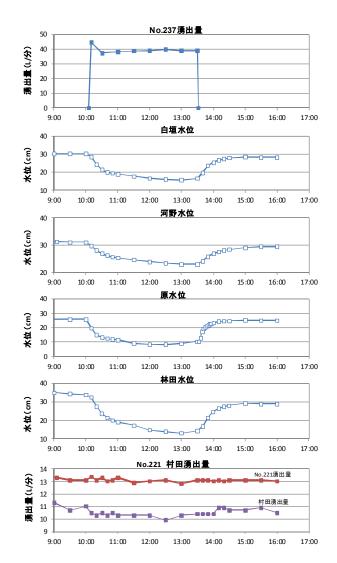


図 3 鉄輪 No. 237 の揚湯に伴う周辺温泉水位または湧出量変化

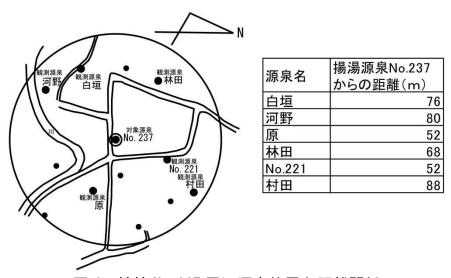


図 4 鉄輪 No. 237 周辺源泉位置と距離関係

Ⅱ 大深度掘削泉での事例

1. 影響調査の背景および源泉状況

当該温泉地では掘削深度約 1400mの 1 源泉を複数の利用施設で分湯し利用がなされていた。そこから約 550m離れた場所に掘削深度約 1300mの新たな温泉掘削が行われ、予備揚湯および揚湯試験時に影響調査が実施された。

既存源泉では普段から、温度、水位の機器モニタリングが行われており、間欠揚湯のため、1日の最高値と最低値が各々記録されている。調査期間中はできるだけ一定周期での間欠揚湯利用とし揚湯量を出来るだけ変えないようにはしている。

2. 調査方法と結果

源泉の利用状況に関しては稼働と停止を約10分おきに繰り返す間欠揚湯利用である。毎日の最高温度が揚湯時の温度、毎日の最低水位は揚湯時に記録されたものと考えて良い。この揚湯量に関してはモニタリングされていないが、利用施設への送湯状況から揚湯量はおおむね200~220L/min程度とされている。事前のモニタリング結果から浅層から低温水が侵入していることは判明しているので判断には注意を必要とした。

申請源泉の孔内洗浄、予備揚湯開始に伴い既存源泉の水位、水温(毎日の最高・最低値)はいずれも低下傾向を示しており、連続揚湯試験②中に最低値を示した後、申請源泉の揚湯停止後、回復傾向を示している。毎日の水位最低値の変化を見ると申請源泉の揚湯期間において、既存源泉水位には最大で2m以上の水位低下が認められる。このことから、申請源泉の揚湯量に応じて既存源泉の水位は変動していると判断され、両源泉間は相互に干渉している可能性が高いと考えられた。既存源泉の毎日の温度最高値(揚湯時水温)に4~5℃もの変化が生じた原因は定かではないが、影響による水位の低下に伴い低温水混入量が増加したためではないかと推定されている。

3. 調査結果の判断とその後の対応

申請源泉の連続揚湯試験で設定した揚湯量 390L/min では、既存源泉へ影響していると判断される。本件の場合は、影響による水位低下も問題だが、温度が低下すると加温の必要が生じるため、低温化がより深刻な問題となった。また、揚湯試験期間中における影響は拡大を続け、申請源泉の揚湯に伴い水位低下傾向、温度低下傾向が継続している。短期間の調査では安定しないため、この揚湯量での影響量は十分に把握できていない。このようなことから、既存源泉に

影響を与えない、もしくは許容できる範囲に収まる申請源泉の採取可能量を調べるために、より長期間の影響調査が必要とされ、本調査による揚湯試験に伴う影響調査の後に、再度調査が実施されている。

再調査における具体的内容は、申請源泉の揚湯量を大幅に制限し、かつ段階的(150L/分,50L/分)に変化させて、揚湯量と影響量の関係についての調査を実施している。影響量を確認するには、既存源泉の影響による変動が収まり安定するまで、より長期の調査が必要となり調査は3週間以上行われることとなった。なお、再調査にあたっては既存源泉の温泉採取量(揚湯量)も観測を行うこととし、再調査期間中は、間欠揚湯をせず、連続揚湯で一定量に保つように調整がなされ、正確な影響量の把握に努めている。その後、再調査結果に基づき申請源泉の揚湯量の調整が行われている。

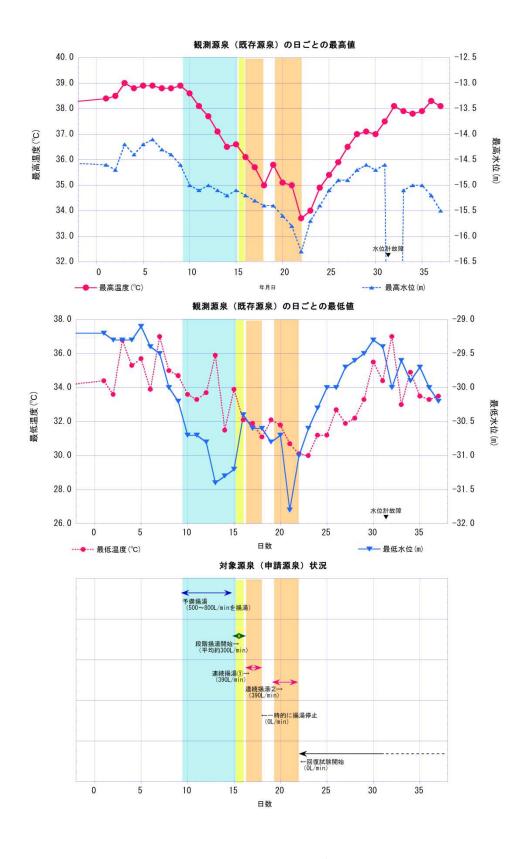


図 5 揚湯試験に伴う影響調査

別紙7

温泉モニタリング実施手法

I 自動観測

1. 観測源泉の選定

自動観測における観測機器の具体例は、次のとおりである(別紙 5 の「I影響調査 3.測定に使用する機器 3-1 機器による測定」に記した機器と基本的に同一である)。

測定項目	主な機種等	規格
温泉水位	圧力式等	±0.1% FS(フルスケール)程度
湧出量	電磁式等	±2%指示値
孔口圧力	圧力発信器等	測定精度±1% FS
温度	測温抵抗体等	分解能 0.1℃
記録方式	アナログ記録、デジタル記録、表示値	連続記録、定時での記録
	の読み取り等	

これら表示器・記録計の配置例を図 1 に示すので参考とされたい。なお、配置例において、流量計・温度計の前後にバイパス管を配置したのは、機材のメンテナンスや交換が容易に行えるように留意したものであり(図 2)、また、バイパス管にドレーンを設けたのは、この形式であれば通常状態時にはバイパス管に水が滞留するので、排除するためである。排除する必要性がなかったり、小さかったりする場合は、バイパス管やバイパス管ドレーンの設置は必要ない。

流量計の下流側(図の右側)には湧出量測定・温泉採取用の吐き出し管を設けており、これは、できるだけ源泉に近い所で温泉を採取できるようにすることと、実測して流量計の指示値を確認できるようにする二つの目的がある(図 3)。

自動記録方式には、大きく分けるとアナログ記録(いわゆるペン式又は打点 式レコーダーによる)とデジタル記録(自動記録計又はパソコン管理)があり、 両者の特徴を併せ持つハイブリッド式の記録計もある。

アナログ記録は連続的な波形記録が行われ、あるイベントに対する変化が忠

(参考)

実に再現される点がメリットだが、データ(記録紙)の読み取りが必要な場合があることと、その管理が悪いと後からの資料整理に支障を来す点がデメリットである。ペン式又は打点式レコーダーによる記録間隔は、記録紙の送り速度によって決められる。

デジタル記録は記録間隔が任意に決められ、データをパソコンに直接取り込むこともでき、データの管理も容易である。しかし、データの記録間隔よりも短い時間単位での変化は記録されないのがデメリットとなる。

記録間隔は、目的とする観測内容によって異なるが、標準的には 1 時間に 1 データの取得で充分であり、ある限られた期間において、細かい時間間隔で変化を把握したければ、さらに短い時間間隔でのデータ取得が可能であり、自動記録計やパソコンの記録容量、データ通信量等に余裕があれば、1 分間隔での測定も十分に可能であるが、通常の観測であればその必要性は小さい。

2. 測定項目

a) 湧出量

湧出量の自動計測は、自動観測に対応した配管用の流量計(電磁流量計や 超音波流量計等)による。

エアリフトによる源泉では、揚湯管内は空気と温泉との混合体となって、 正確な流量が測定できない。そうした源泉では、温泉をタンク(気液分離槽) 等に貯留していったん空気を抜き、そこからの配管(タンクからの送湯管) に流量計を設置するか、気液分離槽にノッチ箱の機能を持たせ、その溢流水 深を自記水位計(圧力式、静電容量式の他、超音波式でも対応可能)で記録 することになる。ただし、後者の場合には、水位測定値を流量に換算する演 算機能が必要である。

可燃性天然ガスを含む温泉も、基本的にはエアリフト源泉と同様の処置が必要だが、可燃性天然ガスに対する所定の災害防止対策を施すことが求められる。

なお、スケールが生成しやすい温泉、腐食の激しい温泉、高温の温泉等では、このような観測機器は耐久性に乏しく、実用的ではないこともあるので注意が必要である。

b)温度

温度の自動記録は、配管に温度センサー(測温抵抗体等)を設置して行う。 後述する水位計には、測温機能が付帯されているものもあり、そうした水位 計を用いていれば、地上部に温度センサーを配置する必要性はあえてない。 ただし、測温機能付き水位計は、設置場所によっては湧出温度とは異なる温 度を測定してしまう場合があるので、注意が必要である。

c)水位·孔口圧力

水位の測定機器には、センサーを水中に浸すことなく測定する機器(上記した超音波式等の隔測式水位計)がある。ノッチ箱で水位測定する場合や、自然湧出泉等で広い水面を持ち、地表から水面までの深さが浅い場合には、このような隔測式水位計も適用可能である。

しかし、一般の源泉は口径が細く、温泉水位も深いために、隔測式水位計は使用できないことが多い。一般的な源泉では、圧力式等のセンサーを水没させる機器を用いる。設置深度が深い場合、センサーを後から挿入することは容易ではなく、通常はポンプ挿入時に水位センサーを揚湯管に拘束し、ポンプと同時に設置することになる。このため、センサーが故障した場合でも、それを交換するにはポンプの昇降作業が必要になる。また、温泉であるが故に、高温、ガスを含む、スケールが生成するといった特徴があり、これらが水位計の耐用を短くする。こうした温泉では、温泉水中に高価な機器が浸らない気泡式水位計を用いるのも一方法である。

なお、可燃性天然ガスを含む温泉では、例えばポンプ地上部で水位計のケーブルが通る部分に隙間ができると、そこからガスが地表に漏出する可能性があるので、所定の災害防止対策を施すことが求められる。

自噴源泉の場合の孔口圧力は、源泉孔口に圧力センサーを設置して自動観測化する。圧力計の選定に当たっては、当該源泉の最大圧力又は通常状態における圧力を考慮すべきである。

Ⅱ 現地観測

1. 観測機器

現地観測における観測機器の具体例は、次のとおりである。これは別紙 5 の「I影響調査 3.測定に使用する機器 3-2 観測員による定時測定」に記した機器と基本的に同一であり、機器の指示値の読み取りであっても構わない。

測定項目	主な機種等	測定
温泉水位	触針式(ロープ式)等	1cm単位以下で読み取り
湧出量	容積法、ノッチ法等	L/分単位で有効数字三桁程度
孔口圧力	ブルドン管式等(測定精度±1.6% FS	機器の指示値
	程度)	
温度	デジタル温度計等(分解能 0.1℃)と	0.1℃単位で現地測定
	標準温度計の併用	
記録方式	_	現地測定・記録

[※] 湧出量と温度を測定するために、源泉井戸近くに採取した温泉の全湧出量を吐き出すことができるバイパス管を設置する必要がある。

測定記録の間隔は、目的とする観測内容によって異なる。現地観測では自動観測よりも頻繁な測定はできないが、1日1回~週1回程度の測定を標準としたい。これが困難な場合であっても、月1回の測定頻度は確保すべきである。なお、測定は定時観測(毎回、ほぼ同一時刻で測定すること)、同一条件下(例えば、ポンプを自動運転している場合等では、ポンプの運転中か休止中かのいずれかに統一する)での測定を基本とする。

2. 測定項目

a) 湧出量

現地での湧出量の測定方法は、容積法を主体とする。これは、吐出口を計測しやすい場所に設け容量既知の容器が満杯になるまで(あるいはある一定の容量に達するまで)の時間を計測し、【容量(L)÷時間(秒)×60(毎分への換算)】で湧出量を計算するものである。なお、測定ミスや湧出量の脈動等に対処するため、測定は複数回行い、その平均値を採用すべきである。容積法による測定を行うためには、図1~3に示した吐き出し管が必要である。

[※] 湧出量の実測が困難な場合は、現地の状況に応じて工夫する(例: タンクからの流出を 止め、タンク内の水位上昇速度を測定して量に換算する等)

こうした吐き出し管がない場合には、タンク流入部で測定したり、水道水等が混じらないようにして浴槽への流入口で測定したりするほかない。タンクからの流出を止め、タンク内の温泉の上昇速度から湧出量を求めることも可能だが、タンク容量(断面積)が正確に把握できていないと精度が落ちるので、注意が必要である。

また、自動計測ではないが、現地指示又は遠隔指示による流量計を用いることも有用である。特に、温泉の採取が断続的である場合、上記の容積法では測定時間内の瞬間的な量しか把握できないことから、現地指示型であっても、積算機能がある流量計であれば、より実態に即した湧出量が把握できる。

ただし、スケールが生成しやすい温泉、腐食の激しい温泉等では、このような観測機器は耐久性に乏しく、実用的ではないこともある。実態に即した観測態勢を整えることが重要である。

b)温度

温度の測定は、上記の吐き出し管があれば、デジタル型温度計や水銀温度計によって容易に測定できる。

c)温泉水位・孔口圧力

高温、ガスを含む、スケールが生成するといった源泉で、水位計の耐用が難しい温泉では、触針式(ロープ式)水位計によって、地上部から温泉水位を測定する。源泉孔内には動力ケーブル等があり、水位計のスムーズな挿入を困難とするので、水位測定用の小口径のパイプを、水中ポンプ挿入時に同時設置することが必要である。源泉孔内にスペースが無ければ、あらかじめエアチューブを源泉に設置しておき、チューブから空気を送りその圧力から水位に換算する方法もある。

なお、可燃性天然ガスを含む温泉では、ポンプ地上部で水位測定管を通って可燃性天然ガスが地表に漏出する可能性や空気を源泉井戸孔内に送ることとなるので、所定の災害防止対策を施すことが求められる。

自噴源泉の場合の孔口圧力は、源泉孔口に圧力計(ブルドン管式等)を設置して、その指示値を記録することとする。圧力計の選定に当たっては、当該源泉の最大圧力もしくは通常状態における圧力を考慮すべきである。

通常状態

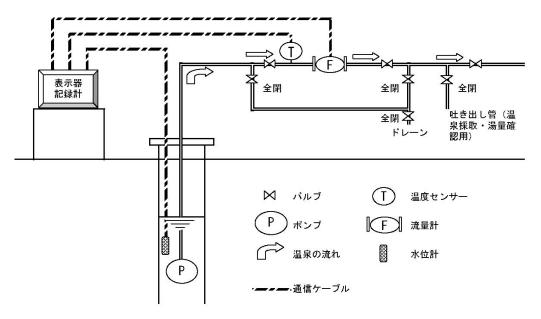


図 1 観測機器設置事例 (通常状態)

流量計などメンテナンス時

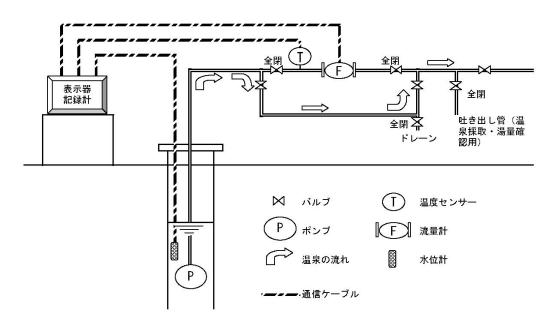


図2 観測機器設置事例(メンテナンス時)

温泉採取・湯量確認時

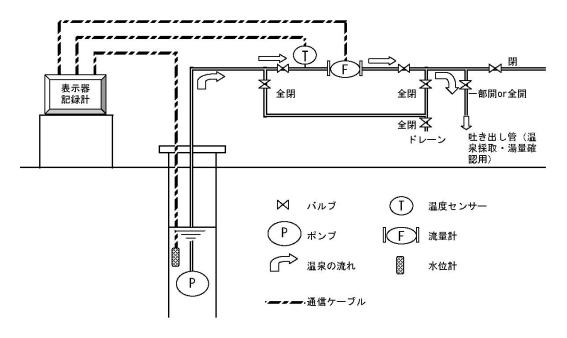


図3 観測機器設置事例(湧出量測定時)

別紙 8

長期モニタリング事例

|I 大深度掘削泉での事例|

1.調査の概要

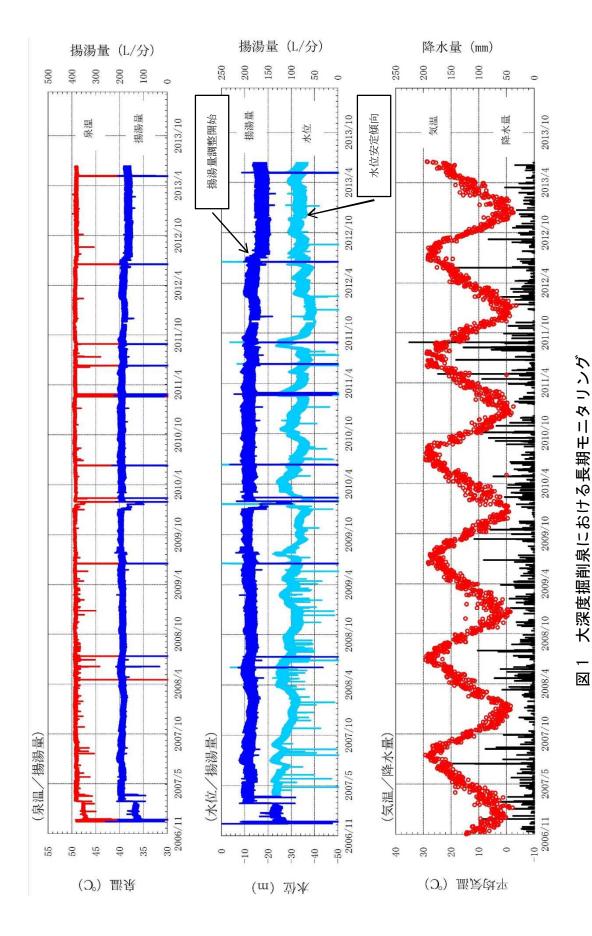
当該源泉は掘削深度 1500m、水中ポンプ利用の掘削揚湯泉である。約 1100m 離れた場所に自然湧出泉が分布することから、泉温、揚湯量、水位の項目について自動観測機器を用いた長期の詳細モニタリングによる資源動向の監視が実施されている。

2. モニタリング調査結果

当初の揚湯試験結果により、400L/分程度の温泉が適正揚湯量と判断されていたが、同地域の揚湯量規制の上限 200L/分に制限して、かつインバーター制御による揚湯利用が行われていた。しかし、かなり余裕をもった揚湯利用が行われていたにも関わらず、水位の経年的な低下傾向が現れ継続したため、掘削から6年経過した 2012 年7月から平均 160L/分程度に減量調整を行った。その後、水位は回復傾向に転じ、安定することとなった(図 1)。

また、この源泉では大深度掘削泉では珍しく降雨に伴う水位変動がモニタリングにより確認されている。

温泉モニタリングを実施していたことで、掘削当初の揚湯試験結果からは想定されなかった温泉水位の低下傾向が明らかとなり、揚湯量を抑えることで地域の資源保護が可能となった。なお、当該源泉では引き続きモニタリング調査が実施されており、周辺の既存源泉への影響は確認されていない。



- 78 -

別紙9

水質基準基準について

1. 水質汚濁に係る環境基準について(昭和46年12月28日 環境庁告示第59号) 最終改正: 平成25年3月27日環境省告示30号

別表1 人の健康の保護に関する環境基準より一部抜粋

項目	基準値	
カドミウム	0.003mg/L 以下	
全シアン	検出されないこと。	
鉛	0.01mg/L 以下	
六価クロム	0.05mg/L 以下	
砒素	0.01mg/L 以下	
総水銀	0.0005mg∕L以下	
アルキル水銀	検出されないこと。	
PCB	検出されないこと。	
ジクロロメタン	0.02mg∕L 以下	
四塩化炭素	0.002mg∕L以下	
1,2-ジクロロエタン	0.004mg∕L以下	
1,1-ジクロロエチレン	0.1mg/L 以下	
シス-1,2-ジクロロエチレン	0.04mg/L 以下	
1,1,1-トリクロロエタン	1mg/L 以下	
1,1,2-トリクロロエタン	0.006mg∕L以下	
トリクロロエチレン	0.03mg∕L 以下	
テトラクロロエチレン	0.01mg/L 以下	
1,3-ジクロロプロペン	0.002mg∕L以下	
チウラム	0.006mg/L以下	
シマジン	0.003mg∕L以下	
チオベンカルブ	0.02mg∕L 以下	
ベンゼン	0.01mg/L 以下	
セレン	0.01mg/L 以下	
硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素	10mg/L 以下	

ふっ素	0.8mg∕L 以下	
ほう素	1mg∕L 以下	
1, 4ージオキサン	0.05mg∕L以下	

備考

- 1 基準値は年間平均値とする。ただし、全シアンに係る基準値については、最高値とする。
- 2 「検出されないこと」とは、測定方法の項に掲げる方法により測定した場合において、その結果 が当該方法の定量限界を下回ることをいう。別表2において同じ。
- 3 海域については、ふっ素及びほう素の基準値は適用しない。
- 4 硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素の濃度は、規格 43.2.1、43.2.3 又は 43.2.5 により測定された 硝酸イオンの濃度に換算係数 0.2259 を乗じたものと規格 43.1 により測定された亜硝酸イオン の濃度に換算係数 0.3045 を乗じたものの和とする。

2. 水質基準に関する省令 (平成 15年5月30日厚生労働省令第101号)

最終改正:平成23年1月28日厚生労働省令第11号より抜粋 水道法(昭和32年法律第177号)第4条第2項の規定に基づき、水質基準に 関する省令を次のように定める。

	項目名	基準値	
1	一般細菌	1mLの検水で形成される集落数が 100 以下であること。	
2	大腸菌	検出されないこと。	
3	カドミウム及びその化合物	カドミウムの量に関して、0.003mg/L 以下であること。	
4	水銀及びその化合物	水銀の量に関して、0.0005mg/L 以下であること。	
5	セレン及びその化合物	セレンの量に関して、0.01mg/L 以下であること。	
6	鉛及びその化合物	鉛の量に関して、0.01mg/L 以下であること。	
7	ヒ素及びその化合物	ヒ素の量に関して、0.01mg/L 以下であること。	
8	六価クロム化合物	六価クロムの量に関して、0.05mg/L 以下であること。	
9	シアン化物イオン及び塩化シアン	シアンの量に関して、0.01mg/L 以下であること。	
10	硝酸態窒素及び亜硝酸態窒素	10mg/L 以下であること。	
11	フッ素及びその化合物	フッ素の量に関して、0.8mg/L 以下であること。	
12	ホウ素及びその化合物	ホウ素の量に関して、1.0mg/L 以下であること。	
13	四塩化炭素	0.002mg/L 以下であること。	
14	1,4-ジオキサン	0.05mg/L以下であること。	
15	シス-12-ジクロロエチレン及び 1,2-ジクロロエチレン	0.04mg/L 以下であること。	
16	ジクロロメタン	0.02mg/L 以下であること。	
17	テトラクロロエチレン	0.01mg/L 以下であること。	
18	トリクロロエチレン	0.01mg/L 以下であること。	
19	ベンゼン	0.01mg/L以下であること。	
20	塩素酸	0.6mg/L 以下であること。	
21	クロロ酢酸	0.02mg/L 以下であること。	
22	クロロホルム	0.06mg/L 以下であること。	
23	ジクロロ酢酸	0.04mg/L 以下であること。	
24	ジブロモクロロメタン	0.1mg/L 以下であること。	
25	臭素酸	0.01mg/L 以下であること。	
26	総トリハロメタン(クロロホルム,ジブロモクロロメタン,ブロモジクロロメタン及びブロモホルムのそれぞれの濃度の総和)	0.1mg/L 以下であること。	
27	トリクロロ酢酸	0.2mg/L 以下であること。	
28	ブロモジクロロメタン	0.03mg/L 以下であること。	
29	ブロモホルム	0.09mg/L 以下であること。	
30	ホルムアルデヒド	0.08mg/L 以下であること。	

31 以降、次項

	項目名	基準値
31	亜鉛及びその化合物	亜鉛の量に関して、1.0mg/L 以下であること。
32	アルミニウム及びその化合物	アルミニウムの量に関して、0.2mg/L 以下であること。
33	鉄及びその化合物	鉄の量に関して、0.3mg/L以下であること。
34	銅及びその化合物	銅の量に関して、1.0mg/L 以下であること。
35	ナトリウム及びその化合物	ナトリウムの量に関して、200mg/L 以下であること。
36	マンガン及びその化合物	マンガンの量に関して、0.05mg/L 以下であること。
37	塩化物イオン	200mg/L 以下であること。
38	カルシウム、マグネシウム等(硬度)	300mg/L 以下であること。
39	蒸発残留物	500mg/L 以下であること。
40	陰イオン界面活性剤	0.2mg/L 以下であること。
41	(4S,4aS,8aR)-オクタヒドロ-4,8a-ジメチルナフタレン-4a(2H)-オール (別名ジェオスミン)	0.00001mg/L以下であること。
42	1,2,7,7,-テトラメチルビシクロ[2,2,1]ヘプタン-2-オール (別名 2-メチルイソボルネオール)	0.00001mg/L以下であること。
43	非イオン界面活性剤	0.02mg/L 以下であること。
44	フェノール類	フェノールの量に換算して、0.005mg/L以下であること。
45	有機物等(全有機炭素(TOC)の量)	3mg/L以下であること。
46	pH 値	5.8 以上 8.6 以下であること。
47	味	異常でないこと。
48	臭気	異常でないこと。
49	色度	5 度以下であること。
50	濁度	2 度以下であること。

3. 農業用水基準

(昭和45年農林省公害研究会作成:農業農村整備事業計画研究会編、農業農村整備事業計画作成便覧より表:「農業(水稲)用水基準」及び文章:「本基準の取扱い」を抜粋、表については加筆を行った。)

「本基準の取扱い」

農業(水稲) 用水基準は、公害対策基本法第9条の環境基準策定時に、基礎資料とするため当時の各種調査成績に基づく科学的判断から、昭和45年5月農林省公害研究会(会長技術審議官(現技術総括審議官))が学識経験者、研究者等の協力を得て作成したものである。

したがって、法令に基づく環境基準と同列には位置づけられないものの、本基 準の内容、作成時の検討経過等は環境基準に反映されており、農政の展開の場 においては環境基準とともに準拠すべき基本的要件の1つとなっている。

農業(水稲)用水基準

項 目 基 準 値		
pH(水素イオン濃度)	6.0~7.5	
COD(化学的酸素要求量)	6mg/L以下	
SS(無機浮遊物質)	100mg/L 以下	
DO(溶存酸素)	5mg/L以下	
T-N(全窒素濃度)	1mg/L以下	
EC(電気伝導度)*	0.3mS/cm 以下	
As(ヒ素)	0.05mg/L 以下	
Zn(亜鉛)	0.5mg/L以下	
Cu(銅)	Cu(銅) 0.02mg/L 以下	

*:現在 EC については「電気伝導率」という呼び方が一般的で、単位についても[S/m]が使われることが一般的である。0.3mS/cm は、30mS/m に相当する。



沖縄県宮古島市における塩化物イオン濃度の上昇に係る原因究明調査事例 (平成19年度宮古島市地下水保全対策学術委員会報告書より抜粋)

1.2 調査・研究の目的および方針

宮古島最大の水道水源となっている白川田流域において、2004年8月より認められてい る地下水中の塩化物イオン濃度上昇の原因解明とその対策方針について調査・検討を行う ことを目的とする。

1.2.2 原因究明の方針

上記目的、および既存資料整理の結果を受けて、当地の水理地質的特徴及び地下水質か ら原因究明の方針を3つに定め、それぞれの方針に対する調査・解析を以下のように設定

【第1】 更竹地区に負荷された塩化物イオンが、白川田水源等の水源地に、最終的に到達す るか否か。

① 地下水流動に関する調査

既存資料整理調查

地表地質踏查調查、水露頭調查 井戸台帳作成調査

土壌塩化物イオン含有量調査

ボーリング調査(現場透水試験、伝導率測定、自記計設置)

定期地下水位観測調査

【第2】塩化物イオン濃度が上昇した 2003 年8月以降に自川田流域の地下水質がどのよう に変化したかを解析すること。

②地下水イオン組成・濃度に関する調査

③地下水同位体に関する調査

- 【第3】 白川田流域に負荷される塩化物イオンの起源と各起源の寄与度をできるだけ精度よ く推定すること。
 - ④大気・降水由来の塩化物イオン濃度に関する調査

大気中塩化物イオン量調査

降水量調查

⑤原単位に関する調査

既存資料による肥料等使用量調査

土地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査

⑥温泉排水に関する調査

井戸構造、排水箇所および場水量等に関する資料収集調査

温泉水の水質・同位体調査

⑦地下水イオン混合による影響度解析

③マグネシウムイオン・塩化物イオン相関による影響度・寄与率解析

③塩素安定同位体比による寄与率解析

⑩原単位による起源別負荷量および寄与率解析 ①統計解析による寄与率解析 表 1.2.1 に、本検討で実施した調査項目および数量一覧を示す。

表 1.2.1 調查項目一覧

①地下水流動に関する調査 1式 既存資料整理調査 1式 地表也憶体及調査(水準測量含む) 1.5km² (更付付近) 出表也協作及調査(水準測量含む) 1.5km² (更付付近) 土壌塩化物イオン含有量調査 31~38箇所/月1回、計12回 定地下水イオン網及・環境に関する調査 37~38箇所/月1回、計12回 正クリング(油木) 1億所 (②地下水中の塩素安定同位体比・放射性トリチウム 23検体 化学肥料の塩素安定同位体比・放射性トリチウム 23検体 地下水中の塩素安定同位体比・放射性トリチウム 1億所/月1回、計12回 大気・降水出来の塩化物イオン濃度に関する調査 1億所 原た資料による肥料等使用量調査 1億所 原存資料による肥料等使用量調査 11式 (⑤温泉排水(関する調査 11式 (⑥温泉排水(関する調査 11 (⑥温泉排水(関する調査 11式 (⑥温泉排水(関する調査 11式 (⑥温泉排水(関する調査 11式 (⑥温泉排水(関する)では、同位体調査 11式 (⑥塩素安定同位体比による寄与率解析 11式 (⑩原単位による高型海経析 11式 (⑩原単位による基地解析による寄与率解析 11式 (⑩原単位による高与率解析 11式 (⑪精神病による高与率解析 11式 (⑪精神解析による寄与率解析 11式	目 堕	数量
既存資料整理調査 1.5km² (更加² (更加² (更加² (重加² (重加² (重加² (重加² (重加² (重加² (重加² (重	①地下水流動に関する調査	
# 戸	既存資料整理調查	11
		85箇所
ボーリング調査 現場透水試験、電気伝導率測定 37~38箇所/月1回、富足期地下水位観測 定期地下水位観測 37~38箇所/月1回、富工タリング(井戸等) モニタリング(井戸等) 30~31箇所/月1回、富工タリング(海水) モニタリング(海水) 2 下水イオン組成・濃度に関する調査 2 モニタリング(海水) 2 下水イオン組成・濃度に関する調査 2 地下水中の塩素安定同位体比・放射性トリチウム 2 大気中塩化物イオン濃度に関する調査 2 単位に関する調査 4 井戸構造、揚水量等質料に集 2 井戸構造、揚水量等資料収集 2 北水イン混合による影響度解析 5 ボイン混合による影響度解析 2 ボイン混合による影響度解析 2 単位による起源別負荷量および客与率解析 4 財解析による客与率解析 3 計解析による客与率解析 3	土壌塩化物イオン含有量調査	8試料
現場透水試験、電気伝導率測定 5 自記計(水位、EC) 設置 37~38箇所/月1回、計 定期地下水位観測 30~31箇所/月1回、計 下水イオン組成・濃度に関する調査 30~31箇所/月1回、計 モニタリング(井戸等) 23 モニタリング(油戸等) 23 モニタリング(油水) 1 モニタリング(油水) 23 モニタリング(油水) 23 中工水中の塩素安定同位体比・放射性トリチウム 23 ボー学肥料の塩素安定同位体比 1 原水自井の塩素安定同位体比 6 原水自井の塩水のイン・調査 1 井戸構造、揚水量等資料に集 6 財子の混合による影響度解析 6 ボイナン混合による影響度解析 6 東安に同位体比による寄与率解析 6 財解析による寄与率解析 6 財解析による寄与率解析 6	ボーリング調査	3箇所
自記計 (水位、EC) 設置 定期計 (水位、EC) 設置 定期地下水位観測 下水イオン組成・濃度に関する調査 モニタリング (井戸等) 30~31箇所/月1回、計 モニタリング (井戸等) 30~31箇所/月1回、計 モニタリング (井戸等) 30~31箇所/月1回、計 モニタリング (井戸等) 30~31箇所/月1回、計 モニタリング (海水) 100 計 ボード・		5深度
定期地下水位観測 下水イオン組成・濃度に関する調査 モニタリング (井戸等) モニタリング (井戸等) モニタリング (井戸等) モニタリング (海水)	EC)	3箇所
下水イオン組成・濃度に関する調査 モニタリング (井戸等) 30~31箇所/月1回、計1 モニタリング (海水) とこタリング (海水) モニタリング (海水) というグ (海水) 下水同位体に関する調査 大気中塩化物イオン濃度に関する調査 大気中塩化物イオン濃度に関する調査 上地利用支続調査及び原単位塩素負荷量調査 日間日内で調査 上地利用実続調査及び原単位塩素負荷量調査 井戸構造、揚水量等資料に集 上塩化物イオン相関による影響度解析 東安定同位体比による寄与率解析 上地イン混合による音与率解析 素安定同位体比による寄与率解析 中域による寄与率解析 計解析による寄与率解析 上解析による寄与率解析	定期地下水位観測	三
モニタリング (井戸等) 30~31箇所/月1回、計モニタリング (海水) モニタリング (海水) ト水同位体に関する調査 地下水中の塩素安定同位体比・放射性トリチウム 23 化学肥料の塩素安定同位体比 23 化学肥料の塩素安定同位体比 23 (水水田来の塩化物イオン濃度に関する調査 65 株木豊調査 15 株水量調査 15 株水量調査 15 株水量調査 15 株水・土地利用実態調査を発展性 15 株がイナン電台による影響度解析 15 ボルイナン混合による影響度解析 15 素安定同位体比による寄与率解析 25 単位による起源別負荷量および寄与率解析 15 単位による起源別負荷量および寄与率解析 15 14 解析による寄与率解析 15 15 16 17 17 17 17 17 17 17 17 17 17 17 17 17	②地下水イオン組成・濃度に関する調査	
モニタリング (海水) 下水同位体に関する調査 地下水中の塩素安定同位体比・放射性トリチウム 化学肥料の塩素安定同位体比 気、降水由来の塩化物イオン濃度に関する調査 大気中塩化物イオン濃度に関する調査 大気中塩化物イオン濃度に関する調査 上地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査 上地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査 上地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査 上地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査 上地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査 上地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査 上地利用実態調査なび原単位塩素負荷量調査 上地利用実態調査とび原単位塩素負荷量調査 上地利用実態調査を研 に対してよる配料等使用量調査 上地利用実態調査を研 に対してよる部準度解析 素安定同位体比による寄与率解析 単位による起源別負荷量および寄与率解析 単位による起源別負荷量および寄与率解析		田
下水同位体に関する調査 地下水中の塩素安定同位体比・放射性トリチウム 化学肥料の塩素安定同位体比 気・降水由来の塩化物イオン濃度に関する調査 大気中塩化物イオン濃度に関する調査 大気中塩化物イオン濃度に関する調査 放子資料による肥料等使用量調査 単位に関する調査 出地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査 井水イス度制による配料等使用量調査 出力用実態調査及び原単位塩素負荷量調査 井水イスに関する調査 上地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査 上地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査 大水イオン混合による影響度解析 素安定同位体比による香与率解析 単位による起源別負荷量および客与率解析 単位による起源別負荷量および客与率解析	モニタリング(海水)	1箇所
地下水中の塩素安定同位体比・放射性トリチウム 化学肥料の塩素安定同位体比 気・降水由来の塩化物イオン濃度に関する調査 大気中塩化物イオン濃度に関する調査 大気中塩化物イオン濃度に関する調査 整体に関する調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	③地下水同位体に関する調査	
化学肥料の塩素安定同位体比 気・降水田来の塩化物イオン濃度に関する調査 大気中塩化物イオン濃度に関する調査 降水量調査 降水量調査 財産の調査 土地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査 井戸構造、揚水量等資料収集 温泉水の水質、同位体協調査 アペイナン混合による影響度解析 素安定同位体比による香与率解析 単位による起源別負荷量および客与率解析 計解析による寄与率解析	チウ	23検体
 気・降水田来の塩化物イオン濃度に関する調査 大気中塩化物イオン濃度に関する調査 降水量調査 単位に関する調査 財産資料による肥料等使用量調査 土地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査 井地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査 井井構造、揚水量等資料収集 温泉水の水質、同位体調査 ボャイオン混合による影響度解析 ガネシウム、塩化物イオン相関による影響度・寄与度解析 素安定同位体比による香与率解析 単位による起源別負荷量および客与率解析 計解析による寄与率解析 	化学肥料の塩素安定同位体比	1検体
大気中塩化物イオン量調査 降水量調査 単位に関する調査 既存資料による肥料等使用量調査 土地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査 共作に関する調査 井木に関する調査 井木に関する調査 井木に関する調査 井木では関する調査 カードの水インに関したの影響度・寄与度解析 表安定同位体比による香与率解析 単位による起源別負荷量および客与率解析	④大気・降水由来の塩化物イオン濃度に関する調査	
降水量調査1単位に関する調査1既存資料による肥料等使用量調査白川田土地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査白川田規集水に関する調査白川保調査井戸構造、場水量等資料収集出泉水の水質、同位体調査温泉水の水質、同位体調査大の水道の上る影響度解析アネシウム・塩化物イオン相関による影響度・寄与度解析表安定同位体比による寄与率解析業安定同位体比による寄与率解析単位による起源別負荷量および寄与率解析計解析による寄与率解析特権による寄与率解析	大気中塩化物イオン量調査	6箇所
単位に関する調査 田存資料による肥料等使用量調査 土地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査 土地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査 長様水に関する調査 井戸構造、場水量等資料収集 温泉水の水質、同位体調査 温泉水の水質、同位体調査 アネイナン混合による影響度解析 素安定同位体比による音与率解析 単位による起源別負荷量および寄与率解析	降水量調査	1箇所
既存資料による肥料等使用量調査 土地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査 土地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査 泉排水に関する調査 井戸構造、揚水量等資料収集 温泉水の水質、同位体調査 温泉水の水質、同位体調査 下水イオン混合による影響度解析 素安定同位体比による寄与率解析 単位による起源別負荷量および寄与率解析 計解析による寄与率解析	⑤原単位に関する調査	
土地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査	既存資料による肥料等使用量調査	1式
保排水に関する調査 井戸構造、場水量等資料収集 温泉水の水質、同位体調査 下水イオン混合による影響度解析 デネシウム・塩化物イオン相関による影響度・寄与度解析 素安定同位体比による寄与率解析 単位による起源別負荷量および寄与率解析 計解析による寄与率解析	土地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査	白川田流域
	⑤温泉排水に関する調査	
	井戸構造、揚水量等資料収集	1式
		1式
	⑦地下水イオン混合による影響度解析	1式
	③マグネシウム・塩化物イオン相関による影響度・寄与度解析	1式
	③塩素安定同位体比による寄与率解析	1式
1	⑩原単位による起源別負荷量および寄与率解析	1式
	①統計解析による寄与率解析	1式



1.2.3 調査方法と検討フロー 前述の方針に従い、検討フローは以下のとおりとした。

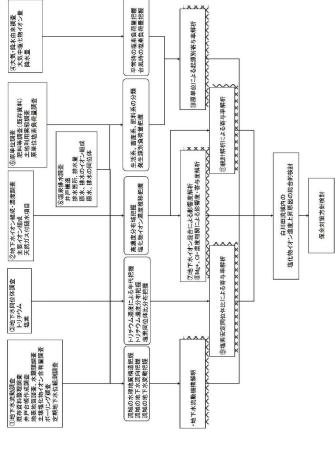


図1.2.1 検討フロー

3 結 器

宮古島において大半の水道原水が採取される最も重要な地下水流域である白川田流域では、2003年10月以降、地下水の塩化物イオン濃度が顕著に上昇してきていることが認められている。本報告は、その原因を究明することを目的とした平成 18 および 19 年度の調査・研究成果をまとめたものである。ここでは、本成果の集約として、総括的な結論を示す。なお、結論を導き出す視点として、白川田流域における地下水流動方向とイオン組成の特徴および塩化物イオンの起源別寄与率権定に関する調査・研究結果に焦点を当てた。

6.3.1 白川田流域の地下水流動

自川田流域内の地下水は、同流域における定期的な地下水位測定結果および水理地質構造から判断すると、最終的に流域北東部の湧水口、すなわち自川田水源およびその近辺に収束され流出していることが確認された。従って、更竹地区において浸透した水も、南東一北西方向に形成された不透水性基盤の回状の溝に沿い、地下水として I-64 (C 井戸)、高野水源、大野水源を経て自川田水源方向に向かうことが確認された。[6.1 自川田流域における地下水流動 参照](図 6.3.1)。

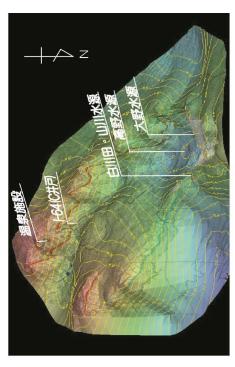
6.3.2 白川田流域の地下水イオン組成

白川田流域内の地下水観測孔および東添道水道水源における地下水のイオン組成、ならびに温泉原水とその排水のイオン組成を調べた。その結果、地下水塩化物イオンが高濃度を示す更竹地区の I-64(C 井戸)等の地下水は、温泉原水とその排水に特徴的に含まれるホウ酸イオンと臭化物イオンを含有しているなど、流域外の地点の地下水イオン組成と比べて明らかに異なった。[5.1.3 イオン組成解析、5.1.4 天然ガス付随水のイオン濃度 参照]温泉排水前(2002 年 10 月)の白川田水源の地下水に、温泉排水を混合した場合に構成される水質に関するシミュレーションを行った。その結果、温泉排水を温泉排水前の白川田水源地下水で 10 倍希釈すると 2004 年 12 月時点の I-64(C 井戸)の地下水イオン組成に、50 倍希釈すると 2004 年 12 月時点の I-64(C 井戸)の地下水イオン組成に、50 倍希釈すると 2004 年 12 月時点の I-64(C 井戸)の地下水イオン組成に、50 倍希釈すると 2004 年 12 月時点の I-64(C 井戸)の地下水イオン組成に、20 倍希釈すると 2004 年 12 月時点の I-67 毎 0 地下水イオン組成に非以した。[5.1.5 地下水イオン混合解析 参照]

白川田流域地下水の塩化物イオン濃度上昇における海水由来と温泉排水由来の塩化物イオンの寄与度を検討するため、マグネシウムイオン(海水の濃度が温泉排水よりも 10倍以上高い)に着目し、地下水の塩化物イオン濃度とマグネシウムイオン濃度との関係(Mg²⁴/Cl:濃度比)と、その経時的変化を調べた。その結果、I-64(C 井戸)、I-38(I 井戸)、高野水源、大野水源の地下水における Mg²⁴/Cl:濃度比は、塩化物イオン濃度が高い時期ほど、温泉排水時期以前における白川田水源地下水の原型的な水質と温泉排水とが混合した場合に形成される Mg²⁴/Cl:濃度比に相似した。【5.1.6 マグネシウムイオン・塩化物イオン・濃度和園法 参照】

また、地下水塩化物イオン濃度を上昇させる原因として、台風が陸上にもたらす海水起

源の塩化物イオンが考えられるため、白川田流域内の高野水源と大野水源を対象に、流域外の海岸沿い湧水の塩化物イオン濃度を比較した。その結果、2003 年 9 月の台風 14 号が直撃した以降、高野水源・大野水源の塩化物イオン濃度最高値は、より海岸に近い山川湧水(ウブカー)、新城湧水および保良ガーの最高値より高かった。



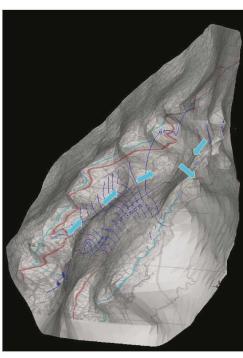


図 6.3.1 白川田流域の不透水性基盤上面コンター(上図)と平常時(2006 年 2 月)における地下水コンター(下図)

注:標高方向は 20 倍に強調して示した。また、青矢印は地下水の流動方向を示す。

6.3.3 白川田流域地下水の塩化物イオンの起源別寄与率

塩素安定同位体比法および Mg²⁺/CI-濃度相関法を用い、I-64(C 井戸)における地下水の塩化物イオン起源別寄与率を推定した。その結果、2006 年を対象とすると、温泉排水の寄与率は前者で 97.3%、後者で 92.1%以上(一部は台風等で負荷された分も含む)と、同地点の地下水中塩化物イオンの大半が温泉排水に由来すると推定された。

原単位法を用い、白川田流域全域を対象とした 2005 年当時における地下水塩化物イオンの起源別寄与率を推定した。その結果、1 日に 92.85m³、304 日間(2004 年 7 月~2005年 4 月)、温泉施設から更竹地区に排水されたとした場合、白川田流域に負荷された塩化物イオン年間量の寄与率は、温泉排水由来が 39.9%、大気・降水由来が 47.4%、その他(肥料・生活排水・家畜ふん尿) 由来が 12.8%と推定された。また同様に、温泉施設からの排水量が 30m³/日(排水期間は同じく 304 日間)であった場合の推定結果は、それぞれ17.6%、64.9%および 17.5%であった [5.3 原単位法による塩化物イオンの起源別負荷量

統計解析手法を用い、自川田水源地下水を対象とした 2005 年当時の地下水塩化物イオンの起源別寄与率を算出した。その結果、温泉排水由来が 17%、大気・降水由来のうち台風影響による上昇分が 30%、その他(平常降雨・肥料・生活排水・家畜ふん尿)由来が 53%となった。この結果を用い、自川田水源における地下水塩化物イオン濃度の年平均値 (2005 年、67.8mg/L)の内訳を求めると、温泉排水由来が 11.5mg/L、大気・降水由来のうち台風影響による上昇分が 20.3mg/L、その他(平常降雨・肥料・生活排水・家畜ふん尿)由来が 36.0mg/L となった。同様に、2006 年(年平均値 88.2mg/L)を対象とした推定結果は、それぞれ 40%(35.8mg/L)、21%(17.6mg/L)および 39%(34.8mg/L)で、2005 年に比べ 2006 年における温泉排水の寄与率が高かった [5.4 統計解析法 参照]。

6.3.4 白川田流域における地下水塩化物イオン濃度の上昇原因に関する総合的考察

台風の常襲する小さな島嶼で、沿岸に位置する白川田流域のような地域の地下水に含まれる塩化物イオン濃度が異常に上昇した場合、その原因は通常、台風により陸域へもたらされた海木に帰されるであろうことは容易に推測できる。事実、近年稀な勢力を有し、2003年9月11日に宮古島を直撃した台風14号は、その後、宮古島の各地の地下水塩化物イオン濃度を上昇させた(第1の事実)。しかしながら一方で、本台風による影響が宮古島に生じたであろうと考えられる時期に重なり、白川田流域地下水の塩化物イオン濃度を上昇させる可能性を有する人為行為があったことも事実である。すなわち、海水の半分程の塩化物イオン濃度を含む温泉が掘削され、その排水が少なくとも 2003年10月から 2005年4月まで、白川田流域の南西端に位置する更竹地区に行われた(第2の事実)。そして第3の事実として、白川田流域地下水の塩化物イオン濃度は、2003年10月以降、顕著な上昇を示してきていた。

このような状況において、本委員会は、白川田流域地下水の塩化物イオン濃度上昇の原因を究明することを目的とした調査・研究を行ってきた。その主な命題は次の3点である。

第1は、更竹地区に負荷された塩化物イオンが宮古島の大半の水道原水を採水する白川田水源等の水源地に、最終的に到達するか否かである。第2は、ここで問題とする時期、すなわち 2003 年 10 月以降において、白川田流域地下水の水質組成はどのように変化したかを解析することである。第3は、白川田流域に負荷される塩化物イオンの起源と各起源の寄与率をできるだけ精度良く推定することであり、簡潔には、台風影響と温泉排水影響の寄与率を求めることである。

その結果、第1の命題に関しては、上述の6.3.1でまとめを示したように、更竹地区において浸透した水は、最終的に白川田流域の水源地に到達することが確認された。したがって水浴された塩化物イオンも同様に、更竹地区から水源地に移動することは自明である。

第2の命題に関しては、上述の 6.3.2 に示したように、温泉原水とその排水は硫酸イオンをほとんど含まず、また海水に比ペマグネシウムイオン濃度がきわめて低いという特性を利用した解析の結果、温泉排水が行われた後の I-64 (C 井戸)の水質組成は、温泉排水を混合した場合に形成される水質組成に酷似することが判明した。この解析結果から、温泉排水に含まれる塩化物イオンが、I-64 (C 井戸)に混入し、その濃度を上昇させる一因になったと結論できる。

第3の命題に関しては、上述の 6.3.3 に示したように、4つの手法を用い、起源別の塩化物イオン寄与率を推定した。その結果、温泉排水地点に近い C 井戸(地下水)への温泉排水の寄与率は 2004~2006 年において 90%を超えると考えられ、また同様に、白川田水源地の地下水への寄与率は、2006 年でおよそ 20~40% (この数値の幅は、温泉排水量が正確に把握できないことに起因する)と推定された。

以上の結果から、近年における白川田流域地下水の塩化物イオン濃度の顕著な上昇に関し、温泉排水の影響は排水地点近傍の地下水に直接的に強い影響を受けたと判断された。白川田水源地における地下水塩化物イオン濃度への温泉排水の寄与率は、上述のように約2~4 割であると推定され、排水地点近傍より温泉排水の寄与率が低いと推定された。このことは、温泉排水地点が白川田流域の南西端上流域に位置するため、下流の水源地に至る過程で、流域の他地域から集まる地下水により希釈されるためと考えられる。

また、台風による塩化物イオンの負荷はいわゆる面源であるのに対し、温泉排水は点源である。このため、温泉排水地点における塩化物イオンの負荷は、水源地に至るまで、その距離に応じた時間差が生じることになる。事実、6.3.3 で示したように、統計解析法によると、白川田水源地下水に対する温泉排水田来塩化物イオンの寄与率は、温泉排水が行われた直後の 2005 年よりも 2006 年の方が高いと推定された。このことは、今回のような点源での地下水負荷の影響が、その直後に水源地で顕在化するとは限らないことを示している。したがって、水道水源流域における地域網羅的な水質監視体制が必要であることもさることながら、地域公共財産である水道原水を保全するため、人為的な負荷を極力生じさせないとたったモラルを、全ての住民が壁持することの重要性を示したと考える。

別紙 11

動力装置許可の審査基準(東京都)

温泉動力の装置の許可に係る審査基準

平成10年 7月 1日 (東京都告示第 724号) 最終改正 平成20年10月24日 (東京都告示第1339号) 地盤沈下防止の観点から、温泉法(昭和23年法律第125号)第11条第3項により 準用する同法第4条第1項の規定に基づく動力の装置の許可に係る審査基準を次 のように定める。

	指定地域	吐出口断面積	一日の揚湯量
1	墨田区 江東区 北区 荒川区 板橋区 足立区 葛飾区 江戸川区	6 平方センチメートル 以下	50立方メートル 以下
2	東京都の区域のうち、1に掲げる区域、八王子市の一部(一般国道411号線との交点以北の都道楢原あきる野線、その交点から一般国道20号線との交点がら一般国道20号線との交点(八王子市高尾町)までの都道八王子あきる野線、その交点から都道八王子町田線との交点までの一般国道20号線及びその交点以南の区域)、青梅市、あきる野市、西多摩町及び島しょ地区を除く区域	21平方センチメートル 以下	150立方メートル 以下

備考 揚湯の状況について、水量測定器及び水位計により確認できること。

揚湯試験事例

I 揚湯試験(集湯能力調査)事例(一般的な事例)

「別紙 5 II 5. 特殊な事例」で示した揚湯試験に関しては II 及び III のような事例が報告されている。特殊事例の紹介に先立ち、一般的な事例を紹介する。なお、段階揚湯試験では限界揚湯量を調査し、安全率をみてその何割かを適正揚湯量と設定する。その後、適正揚湯量を検証するために連続揚湯試験を実施し、過度な水位低下を招くことなく水位の安定を確認することが重要である。

1. 概要

本事例では、6 段階の段階揚湯試験を実施し、揚湯量 - 水位降下量の関係から限界揚湯量を求め、そこから適正揚湯量を設定している。次に設定した適正揚湯量で連続揚湯試験を実施し、その後回復試験で水位の回復状況の確認を行っている。

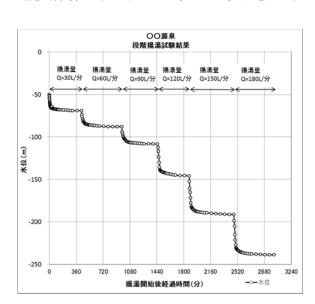


図 1 段階揚湯試験結果

図1における段階試験は、30L/分、60L/分、90L/分、120L/分、150L/分、180L/分として6段階で水位の測定を実施した。この結果を表1に、揚湯量-水位降下量の関係を図2に示す。(図中には対角線上に45°傾斜の線を記入している)。

表 1 段階試験結果

	揚湯量 Q	水位	水位降下 Sw
	(L/分)	(m)	(m)
		-50. 2	
1	30	-69. 1	18. 9
2	60	-87.9	37. 7
3	90	-108.4	58. 2
4	120	-145.8	95. 6
5	150	-191.3	141. 1
6	180	-238.9	188. 7

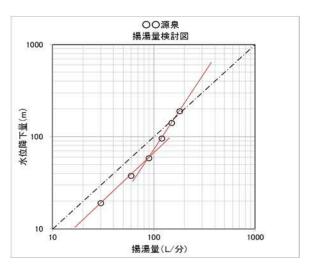
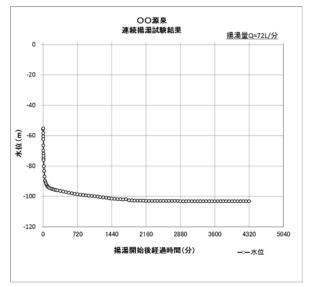


図 2 揚湯量-水位低下量の関係検討図

(参考)

下図では、連続揚湯試験は、段階揚湯試験結果より求めた適正揚湯量 72L/分で実施し、その後回復試験状況を示す。



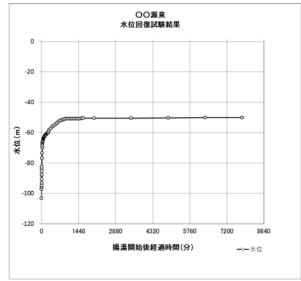


図3 連続揚湯試験結果

図 4 回復試験結果

2. 揚湯試験の判断について

- ・図 2 揚湯試験-水位低下量の関係検討図をみると、3 段階目の 90L/分で変曲点 が確認でき、限界揚湯量と判断し、この限界揚湯量の 80%である 72L/分を適正 揚湯量と設定した。
- ・適正揚湯量 72L/分で実施した連続揚湯試験においても、ほぼ 2 日で安定水位が 得られている。
- ・回復試験においても、ほぼ2日で水位は回復し、試験前の静水位に戻ることが 確認できた。

以上のことから、72L/分が適正揚湯量に相当すると判断される。

Ⅱ 揚湯試験特殊事例① (揚湯によって水位が上昇する場合)

1. 概要

本事例では、段階揚湯試験と連続揚湯試験実施時に水位が上昇する特殊な現象が報告されている。図5の段階揚湯試験結果をみると各段階の揚湯開始直後に一旦水位は低下するが、その後、上昇に転じる変化が認められる。

表 2 段階揚湯試験結果(1回]目)
-----------------	-----

	揚湯量	水位	最終 降下量	最大 降下量
	(L/分)	(m)	(m)	(m)
	0	4. 44		
1	21	4. 58	0. 14	0. 33
2	30	4. 61	0. 17	0.30
3	39	4. 68	0. 24	0. 33
4	45	4. 71	0. 27	0. 34
4	45	4. 71	0. 27	0.34

表 3 段階揚湯試験結果(2回目)

	揚湯量	水位	最終 降下量	最大 降下量
	(L/分)	(m)	(m)	(m)
	0	4. 36		
1	14	4. 42	0.06	0. 21
2	21	4. 43	0.07	0. 17
3	31	4. 50	0. 14	0. 24
4	41	4. 58	0. 22	0. 29
5	46	4. 65	0. 29	0.34

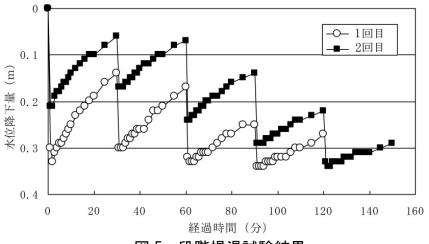


図 5 段階揚湯試験結果

2. 揚湯試験の判断について

揚湯によって水位が上昇する源泉では、温泉付随ガスの増加や他の帯水層からの 井戸内への流入、使用するポンプの問題等、様々な要因が推定されている。

上記のような現象は湧出能力が高い源泉に多くみられ、通常の揚湯試験では解析が困難な場合もある。その場合、適正揚湯量が揚湯試験での設定揚湯量を上回っていることが考えられ、連続揚湯試験結果や段階揚湯試験における最大揚湯量等から判断することも考えられる。

Ⅲ 揚湯試験特殊事例②(湧出量が少なく、通常の揚湯試験実施が難しい場合)

1. 概要

水位低下が大きく揚湯可能量が極めて少ないため、連続揚湯が行えず、通常実施 している段階揚湯試験と連続揚湯試験ができない事例である。また、間欠揚湯によ る揚湯試験後、試験用ポンプを変更し、さらに一部の温泉を温泉井戸内に戻すこと で少量揚湯による段階試験が可能となり、再度試験を実施し適正揚湯量の再検証が 行われ、同様の結論が得られている。

図6の間欠揚湯に伴う水位の変化は、期間①(30分オン、210分オフの繰り返し)では、最低水位、最高水位ともに上昇傾向にあった。期間②(60分オン、180分オフの繰り返し)では最低水位、最高水位ともにやや低下もしくはほぼ安定傾向を示した。このことから、期間①を適正揚湯量と判断している。

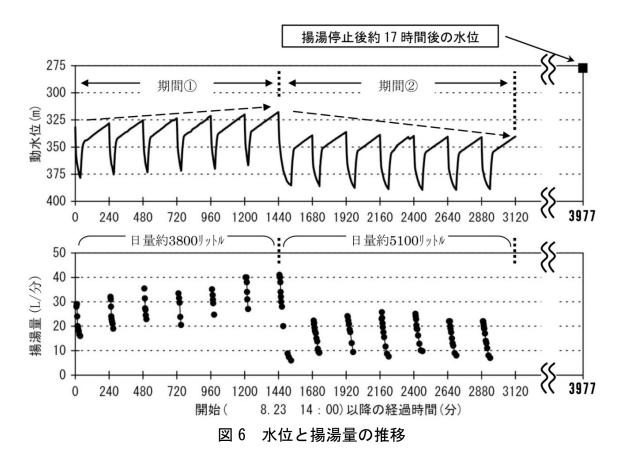


図7の段階試験では、第1段階で4.8L/分、第2段階で3.9L/分、第3段階で2.9L/分と揚湯量を段階的に減じる方法で試験が行われ、段階揚湯試験の最大4.8L/分で405mまで大きく水位が低下している。また、最後に回復試験が行われているが、試験期間内に当初の静水位にまで回復はしていない。

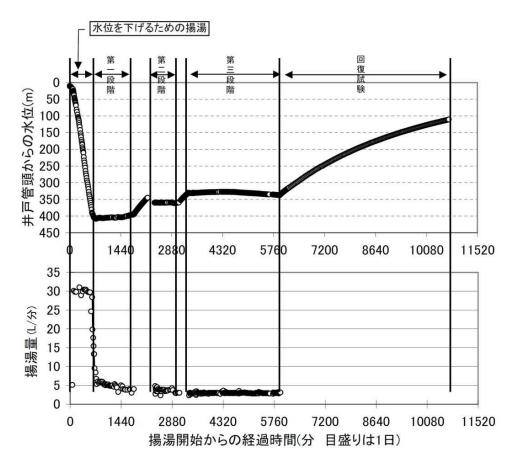


図 7 段階揚湯試験結果図

2. 揚湯試験の判断について

揚湯可能量が非常に少ない源泉や水位降下量が大きく通常の揚湯試験が行えないような源泉では、何らかの方法で動水位の安定が可能な適正採取量を検討することも考えられる。それが、不可能な場合は回復試験結果を参考とし判断する等の方法が考えられる。このような場合で想定されうる対応例を以下に示す。

対応例

- ・ 揚湯試験実施に適し、かつ過度に水位低下を招かないポンプを選定して試験を 実施する。
- ・一定間隔で間欠揚湯を繰り返し行い、水位の安定化を確認する。
- ・ポンプの最低揚湯量を下回る場合、温泉の一部を温泉井戸内に戻して量の調整 を行い段階揚湯試験、連続揚湯試験を実施する。
- ・回復試験を実施し、水位の回復速度から湧出量を推定する。

(参考)

登録分析機関一覧

登録分析機関名 北海道立所生研究所 (中)、北海道業務的会 公奈県主接会センター (株)ホウカン 環境化学分析センター (株)環境科学研究所 太平洋総合コンサルタント(株) (株)環境プロジェクト	所在地 札供市北区北19条西12丁目 + ## + ## # # # # # # # # # # # # # # #	連絡先	金数年月日 H1441	遊戲群与	所在地	多關聯	所在地	連絡先	登録年月日	登録番号
3位立所主研究所 な無温度がある全型生物をセンター ホクカン 環境化学分析センター 環境総合科学 環境科学研究所 環境インジェ 介・ 環境プロジェ 介・ (環境プロジェ 介・ (電域プロジェ 介・ (電域プロジェ 介・) (114 - エニュール) (114 - エニュール)	札幌市北区北19条西12丁目	011-747-2735	H1441	17. CO. CO. CO. CO. CO. CO. CO. CO. CO. CO						
() 食品電業網防会 公衆忠生投資センター ホウカン 環境化学分析センター 環境総合科学 環境科学研究所 に環境科学研究所 に環境科学研究所 に環境プロジェ 介・	の「日本の後、新田は田幸士等す			北海道第1号	39 栃木県	(一社) 栃木県薬剤師会	字都宮市緑5-1-5	028-658-9877	H14.4.8	14栃薬第1号
ホウカン 環境化学分析センター 環境総合科学 環境科学研究所 洋総合コンサルタンド(株) 環域プロジエ 介・	七年中国十四十年 1米日 日の一日	011-824-1348	H14.4.1	北海道第2号	40 栃木県	平成理研(株)	字都宮市石井町2856-3	028-660-1700	H19.3.19	18栃栗第1号
国境総合科学 国境科学研究所 戸洋総合コンサルタント(株) 国域プロジエ 介	旭川市永山14条3丁目3-4	0166-24-5593	H16.12.28	北海道第3号	41 栃木県	(株)総研	字都宮市小幡2-4-5	028-622-9912	H19.3.29	18栃薬第2号
環境科学研究所 洋球会コンサルタンド(株) 電域プロジェ か・	古小牧市豊川町2丁目1番2号	0144-75-2181	H18.8.21	北海道第4号	42 栃木県	(財)栃木県環境技術協会	字都宮市下岡本2145-13	028-673-9080	H20.9.25	20栃薬第1号
:洋総合コンサルタント(株) 環域プロジェクト エコークニューチルま	函館市西桔梗町28番地の1	0138-48-6211	H18,9.21	北海巡游5m	43 群馬県	群馬県衛生環境研究所	前橋市上沖町378	027-232-4881	H14.4.16	群馬楽第1号
環境プロジェクト	鐵路市材本町15番5号	0154-41-2633	H18.10.3	北海道第6号	44 群馬県	(一社) 群馬県薬剤師会	前橋市西片貝町5-18-36	027-223-6355	H14.4.24	群馬薬第2号
ナー・クシニキー・キー・	礼帐市焊购区厚别西1条1丁目8番10号 011-895-6210	011-895-6210	H20.11.18	46振频模计	45 埼玉県	内藤環境管理株式会社	さいたま市南区大字太田窪2051番地2	048-887-2590	H22.12.8	指令薬866号
	志庭市相生町70番地	0123-25-6512	H20.12.4	1001 据规模分	46 千葉県	千葉県衛生研究所	千葉市中央区仁戸名町666-2	043-266-6723	H14.5.14	千葉県登録第1号
日本衛生(株) 環境分析センター	札幌市清田区平岡1条1丁目1書40号	011-888-0122	H20.12.9	11年	47 千葉県	(株)上総環境調査センター	木更津市潮見4-16-2	0438-36-5001	H17.8.26	千葉県登録第2号
(株)第一岸本脳床検査センター 若小牧本社	清小牧市日吉町2丁目3番9号	0144-72-5712	H23.4.26	Γ	48 千葉県	(一財) 千葉県環境財団	千葉市中央区中央港一丁目11番1号	043-246-2078	H19.12.5	千葉県登録第3号
(社)青森県薬剤師会衛生核青センター	計算由大学野木学山口164曲43	017-762-3620	H14.4.1	青森縣第2号	49 千葉県	(財)日本分析センター	千葉市稲毛区山王町295番地3	043-423-5325	H20.3.5	千葉県登録第4号
環境保全(株)	年三市台島助田41-10	0172-43-1100	H21.3.6	非磷脂镁3年	50 東京都	(公財)中央温泉研究所	豊島区高田3-42-10	03-3987-0751	H14.4.4	14健地衛第1号
(一社) 岩手県盆地部会	発因市馬場町3-12	019-641-4401	H14.4.19	岩平底第14	51 東京都	(株)東京水質研究所	中野区中央3-50-9	03-3367-3129	H19.10.16	19東京都温泉分析第2号
一 マー・マー・マー・マー・マー・マー・マー・マー・マー・マー・マー・マー・マー・マ	AN ION THE RESIDENCE OF TANKS TO SEE	010-668-666	11.4.4.96		52 東京都	環境保全(株)	八王子市大和田町二丁目4番14号	042-660-5979	H20.12.18	20東京都温泉分析第3号
**************************************	OCAUSE - ED 18 lei XII de las		07.4.40	Ī	53 神奈川県	神奈川県温泉地学研究所	小田原市入生田586	0465-23-3588	H14.4.1	神奈川県知事登録第1号
5 整十ノンーアンンの(本)	_	1 160 - 610	H14.9.12	I	54 神奈川県	一をベルスをは対して 一番 (一里)	相模原市南区北里1丁目15番1号	042-778-9208	H14.8.30	神奈川県知事登録第2号
(株)大東環境科学 総合技術センター	1地間265番地	019-698-2671	H19.4.12		55 神奈川県	(株)アクアパルス	横浜市金沢区福浦二丁目11番地7	045-788-5101	H19.12.21	神奈川県登録第3号
エヌエス環境(株) 盛岡支店	原因決みたけ4-3-33	019-643-8911	H20.8.19	岩手県第5号	56 神奈川県	(株)ダイワ	平塚市東豊田369番	0463-53-2222	H20.10.20	神奈川県登録第4号
(公財)宮城県公書前生検査センター	仙台市青葉区落合2-15-24	022-391-1133	H14.4.4	的模煳100	新潟県	新潟県保健環境科学研究所	新潟市西区曽和314-1	025-263-9415	H14.4.1	新潟県(登)環企第1号
(一財)宮城県公豫衛生協会	仙台市泉区松森字堤下7番地の1	022-771-4722	H19.2,15	宮城第2号		(一社)県央研究所	三条市吉田1411番地甲	0256-34-7072	H14.6.12	新潟県(登)環企第3号
エヌエス環境(株) 東北支社	仙台市官城野区中野李草畔140	022-254-4561	H21.9.9	金田 報報 3	59 新湖県	(一財) 新潟県環境分析センター	新潟市江南区祖父興野53-1	025-284-6500	H14.7.22	新潟県(登)環企第4号
秋田県健康環境センター	校田市千校久保田町6-6	018-832-5005	H14.4.17	秋田第1号	90 新潟県	(一社)新潟県環境衛生中央研究所	長岡市新産2-12-7	0258-46-7151	H14.10.10	新潟県(登)環企第5号
(株)秋田県分析化学センター	秋田市八橋丰下八橋191-42	018-862-4930	H14,4,18	秋田第2号	61 新潟県	一多ベル 赤柱 真窓 解 ゴ (相一)	上越市下門前1666番地	025-543-7664	H15,9,8	新潟県(登)環企第6号
以) 秋田県総合保健等集団(児塔線査セン	牧田市子牧久梁田町6一6	018-831-2011			62 富山県	富山県衛生研究所	射水市中太閤山17丁目1番地	0766-56-5506	H14.4.25	国山—01
(14	(秋田市寺内院振3-1-24)	(018-845-9293)	H15.12.19			(株)遠研	富山市八日町247-17	076-429-3275	H15.5.13	第1111111111111111111111111111111111111
山形県衛生研究所	山影市十日町11-6-6	023-627-1371	H14.4.26	强保分析山形第1号	64 富山県	(株)安全性研究センター	富山市興人町2-62	076-431-6810	H17.1.7	富山一04
日本環境科学(株)	山形市萬木6番地	023-644-6900	H14.6.3	温泉分析山形第2号	65 富山県	ゼオンノース(株)環境分析事業部	高岡市荻布630	0766-25-6385	H17.5.6	富山一05
(株)丹野	山形市松晃町12-3	023-641-1141	H14.9.4	海東分析山形第3 年	当川思 99	ダイヤモンドエンジニアリング(株)分析事業所	魚津市本新751	0765-24-3521	H118.1.26	90一川思
(株)埋研分析センター	館岡市道影町18-17	0235-24-4427	H19.5.25	端张公护山形架4阜	67 富山県	(株)環境理研	砺波市千代248番地3	0763-33-2303	H19.1.23	富山一07
ネクスト環境コンサルタント(株)	米沢市アルカディア1丁目808-17	0238-29-0025	H19.11.20	福泉分析山形第5年	88 富山県	アースコン サル(株)	射水市戸破8番地17	0766-56-1180	H19.4.16	80-11周
(一社)福島県薬剤師会	福烏市蓬菜町2丁目2番2号	024-549-2198	H14.4.3	410米14	69 石川県	石川県保健環境センター	金沢市太陽が丘1-11	076-229-2011	H14.4.1	第1号
県衛生研究所	福島市方木田字木戸内16番6号	024-545-8694	H14.4.5		70 石川県	(一財)北陸保健衛生研究所	金沢市太陽が丘3-1-2	076-224-2122	H14.4.1	第2号
新環境分割センケー 福島県分割センター	邓山市高久田町卸一丁目104番地1	024-959-1771	H18.12.7	中	71 石川県	(株)エオネックス	金沢市東蛟爪町1-19-4	076-238-9685	H17.3.31	第3号
(4) 福島県保健衛生協会	福島市方木田李木戸内19番地6	024-546-0391	H20.6.9	福島鄉4章	72 石川県	(株)金沢環境サービス公社 技術部分析センター	金沢市御影町23-10	076-243-3191	H21.3.12	第4号
県環境検査センター(株)	都山市田村町金屋中下夕河原60番地1	024-941-1719	H20.10.30	市9級明報	73 福井県	(株)福井環境分析センター	越前市北府2-1-5	0778-21-0075	H17.3.3	第3号
日本化学問題センター	路山市松木町2番26号	024-942-6676	H248.16		74 福井県	(株)北陸環境科学研究所	福井市光陽4-4-27	0776-22-2771	H19.4.1	第4号
大学域の維持部分を	★四十次四十分 1	9805-906-9086	H1452	T	75 山梨県	(株)山梨県環境科学検査センター	甲斐市竜王新町2277-12	055-278-1600	H14.4.8	14山梨み自第1号
10分割を発売した。 10分割 10分割 10分割 10分割 10分割 10分割 10分割 10分割	で の の は が の の の の の の の の の の の の の の の の の の の の	029-241-6662	30 7 017	が発言を対する。	76 山梨県	山梨県衛生環境研究所	甲府市富士見1-7-31	055-253-6721	H14.4.8	14山梨み自第2号
のながれ、カーは、	1 1000日 1000日 11000日 1	020-836-7011	101110	大阪田の名は作り田	77 山梨県	(株)メイキョー	甲府市徳行2丁目2-38	055-228-2858	H16.12.14	16山梨み自第3号
200 E 2 100 100 100 100 100 100 100 100 100 1	ti on in the second	107-020-020	01.7.00	A SAME LE RESECTION OF THE PERSON OF THE PER	78 山梨県	(社)山梨県食品衛生協会	甲府市国母6丁目5-1	055-228-1830	H17.1.7	16山梨み自第4号
ロエハンーン・コン・コント	10 T T T T T T T T T T T T T T T T T T T	0584-00-4830	HZ0.0.20	がはまない	79 長野県	長野県環境保全研究所	長野市大宇安茂里宇米村1978	026-227-0354	H14.4.1	長野県第1号
					80 長野県	(一社)長野県薬剤師会検査センター	松本市旭2-11-20	0263-32-0276	H14.4.1	長野県第2号
	(一限) 宮城県公衆新生協会 エヌエス環境(株) 東北支柱 秋田県健康環境センター (株) 秋田県砂布化学センター (体) 秋田県砂・銀電車・電子 (金) 秋田県総合・保建車・電田・ (金) 大田島県 東州 (株) - 国本の支持・ (本) - 一 (本) - 一	但台市家区松海宇堤下7番地の1 他台市宮城野区中野宇草畔1-42 校田市千校久保田町6-6 校田市千校久保田町6-6 (校田市・校久保田町6-6 (校田市・校久保田町6-6 山野市十日1-6-6 山野市十日1-6-6 山野市十日1-6-6 山野市十日1-6-6 山野市十日1-6-6 山野市十日1-6-6 山野市十日1-6-6 山野市十日1-6-6 山野市大田市1-6-6 山野市大田市1-6-6 山野市大田市1-6-6 山野市大田市1-6-6 山野市大田市1-6-6 山野市大田市1-6-6 山野市大田市1-6-6 北市大人加丁イア1丁目308-17 条沢市ア大西東1-8-1 森山市共内全皇宇下夕河原60番地1 森山市共内全皇宇下夕河原60番地1 森山市共内全皇宇下夕河底60番地1 森山市共和全産中夕河底60番地1 本口市左原町578-47 水戸市左原町578-47	但台市気区松降手場下7番地の1 他台市営城野区中野羊草料1-0 校田市千枚久保田町6-6 校田市千枚久保田町6-6 (校田市・4枚久保田町6-6 (校田市・4枚久保田町6-6 山形市井1-6-6 山形市共20-12-3 館岡市道8町18-17 業沢市アルガディア17目203-17 展島市本共戸の18-8-9 塩島市方木田羊水戸の16番6号 郡山市高人田町和一7目104番地1 福島市方木田羊水戸内16番号 郡山市高村町全屋羊下夕河原80番1 森山市高村町全屋羊下夕河原80番1 森山市長野町28-47 水戸市左原町598-47 水戸市左原町598-47 水戸市左原町598-47 水戸市左原町598-47 水戸市左原町598-47	466市京区松高字様下7番巻の1 022~254~4561 H21.93 始台市宮城野区中野子草料140 022~254~4561 H21.93 秋田市千秋久保田町6一8 018~832~5005 H144.17 秋田市千秋久保田町6一8 018~832~5005 H144.17 秋田市千秋久保田町6一8 018~831~2011 H14.28 山形市井八橋191~2.4 018~845~223 H14.28 山形市松見町12~3 023~624~632 H14.4.3 塩島市大木田宇木戸内15番号 023~644~427 H19.5.25 米沢市ブルカイイア17目808・17 0238~29~0025 H19.11.20 福島市方木田宇本戸内15番号 024~549~1771 H18.12.7 福島市方木田宇本戸内15番号 024~549~0391 H26.3 森山市高久田町都一丁目104番巻1 024~942~1771 H18.12.7 福島市方木田宇本戸内15番号 024~546~0391 H26.5 森山市高久田町都一丁目104番巻1 024~942~6576 H26.9 森山市高久田町都一丁目104番巻1 024~941~1779 H20.6 本戸市笠原町503番2 024~545~0391 H26.5 本戸市笠原町503番2 024~545~0391 H26.5 本戸市笠原町503番2 029~310~9096 H14.5 本戸市笠原町503番2 029~311~913 H19.7.18 日立市弁天町3・10~2 029~241~6552 H19.7.5 日立市弁天町3・10~2 029~535~7011 H19.7.18	406市京佐松寺東東下7番地の1 022-771-4722 H192.15 宮城第2号 406市京保野区中野宇草鮮140 022-254-4561 H21.99 宮城第3号	# 自告市京区 に	4 始合市点保 に	# 自告所な配達事業等下書物の1 (222—254—4561 H21.04) B (監報32号 50 解32円 (一位) (中) 新RR国政政分析でンター	場合所提絡を発表を 場合所で発展的中野事業 19 19 19 19 19 19 19 1	特別



-	1	2 mm mm of 5 mm m	1	**	1 1 1 1		新林府	かるなが
	所在地	宣歌が祈儺賜名 (井)封徳井徳開発センター	新作力	連帮先	登繁年月日 H14103	一	123 大阪府	(一社)大阪府薬剤師会
	長野県	(株)コーエキ	成為 形式 引起式 100 m 以 100 m x x x x x x x x x x x x x x x x x x	0266-23-2155	H14 10 22	大式 水光 ひら 長野 県第4号	124 大阪府	(株)関西環境センター
	長野県	(株)環境科学	松本市大字笹賀7170-3	0263-88-8808	H16.1.23	長野県第5号	125 大阪府	(株)片山化学工業研究所
- 48 - 4	長野県	環境未来(株)分析センター	東筑摩郡朝日村古見3757-1	0263-99-1811	H16.2.27	長野県第6号	126 大阪府	(株)ケイ・エス分析センター
82	長野県	(社)上田薬剤師会検査センター	上田市大字国分994-1	0268-29-1132	H16.11.26	長野県第7号	127 兵庫県	兵庫県立健康生活科学研究
98	長野県	(社)長野市薬剤師会検査センター	長野市若里5-11-1	026-227-3722	H16.11.30	長野県第8号	128 兵庫県	(財)ひょうご環境創造協会
87	長野県	(株)環境技術センター	松本市大字笹賀5652-166	0263-27-1606	H17.12.1	長野県第9号	129 兵庫県	(株)HER
88	長野県	(株)信濃公害研究所	北佐久郡立科町芦田1835-1	0267-56-2189	H19.8.23	長野県第10号	130 奈良県	(有)奈良環境調和研究所
68	長野県	(一社) 長野県労働基準協会連合会環境測定部	松本市大字神林字小坂道7107-55	0263-40-3811	H20.3.28	長野県第11号	131 奈良県	野村興産(株)
96	長野県	南信環境管理センター(株)	上伊那郡箕輪町大字中箕輪12253	0265-79-1871	H20.8.27	長野県第12号	132 和歌山県	和歌山県環境衛生研究セン
16	長野県	(一財) 中部公衆医学研究所	飯田市高羽町6-2-2	0265-24-1509	H21.10.30	長野県第13号	133 和歌山県	(一社和歌山県薬剤師会
92	長野県	ユートピア産業(株)	長野市青木島町青木島 乙258-1	026-284-4681	H24.5.16	長野県第14号	134 鳥取県	(財)鳥取県保健事業団
93	岐阜県	岐阜県保健環境研究所	各務原市那加不動丘1-1	058-380-2100	H14.10.25	岐阜県第1号	135 島根県	(公財) 島根県環境保健公社
96	岐阜県	(財)岐阜県公衆衛生検査センター	岐阜市曙町4-6	058-247-1300	H16.12.22	岐阜県第2号	136 岡山県	(財)岡山県健康づくり財団
95	岐阜県	(株)神岡衛生社	飛騨市神岡町東雲375	0578-82-0337	H18.1.4	岐阜県第3号	137 広島県	(株)日本総合科学環境技術
96	岐阜県	(株)総合保健センター	可児市川合136-8	0574-63-7703	H19.2.27	岐阜県第4号	138 広島県	(一財)広島県環境保健協会
97	岐阜県	(株)環境測定センター	羽島郡岐南町上印食3-152	058-247-2000	H22.4.28	岐阜県第5号	139 田口階	山口県環境保健センター
86	静岡県	(一財) 特岡県生活科学検査センター 焼津検査所	静岡市葵区北安東4-27-2	054-621-5003	H14.4.8	静岡県第1号	140 山口県	学校法人香川学園宇部環境
66	静岡県	(株)静環検査センター	藤枝市高柳2310	054-634-1000	H19.3.28	静岡県第2号	141 山口県	(公財)山口県予防保健協会食品
00	静岡県	日本総研(株)	浜松市南区西島町1622	053-425-7531	H19.9.28	静岡県第3号	142 徳島県	(一社) 徳島県薬剤師会検書
10	静岡県	東邦化工建設(株)	駿東郡長泉町上土狩字高石234	055-986-9595	H21.1.28	静岡県第4号	143 香川県	香川県環境保健研究センタ-
102	静岡県	(株)サイエンス	静岡市葵区瀬名中央1-7-55	054-261-8212	H21.2.10	静岡県第5号	144 香川県	(一社)香川県薬剤師会検査
103	静岡県	(株)中部衛生検査センター	島田市島663-3	0547-46-2348	H21.3.30	静岡県第6号	145 愛媛県	愛媛県立衛生環境研究所
104	静岡県	芝浦セムテック(株)	沿津市大岡2068-3	055-924-3450	H22.3.29	静岡県第7号	146 高知県	高知県衛生研究所
105	愛知県	愛知県衛生研究所	名古屋市北区辻町宇流7一6	052-910-5644	H14.4.4	爱知県第1号	147 高知県	(一社)高知県食品衛生協会
106	愛知県	(株)環境科学研究所	名古屋市北区若鶴152	052-902-4456	H17.1.28	爱知県第2号	148 福岡県	(一財) 九州環境管理協会
107	愛知県	(一財)中都微生物研究所	豊川市御津町赤根宇下川48	0533-76-2228	H17.4.1	爱知県第3号	149 福岡県	福岡県保健環境研究所
108	愛知県	(株)東海分析化学研究所	豊川市御津町赤根李下川50	0533-75-2250	H19.3.23	爱知県第4号	150 福岡県	九電產業(株)環境部
90	109 愛知県	(株)コスモ環境衛生コン サルタント	名古屋市西区天塚町4-8	052-529-2656	H23.4.26	愛知県第5号	151 福岡県	(公財) 北九州生活科学セン
110	三重県	三重県保健環境研究所	四日市市被町3690-1	059-329-2917	H14.4.16	三重県知事登録第1号	152 福岡県	(株)太平環境科学センター
Ξ	三重県	(一財)三重県環境保全事業団	津市河芸町上野3258番地	059-245-7508	H14.12.24	三重県知事登録第2号	153 福岡県	(株)シー・アール・シー食品環境衛
112	三重県	(株)イナテック	いなべ市員弁町市之原10番地	0594-74-4526	H19.11.12	三重県知事登録第3号	154 佐賀県	佐賀県衛生薬業センター
13	三重県	(株) 東海テクノ 四日市分析センター	三重県四日市市牛起1丁目2番15号	059-340-7767	H24.2.2	三重県知事登録第4号	155 佐賀県	(一財)佐賀県環境科学検査
411	滋賀県	滋賀県衛生科学センター	大津市御殿浜13-45	077-537-3050	H14.4.5	滋賀県第1号	156 長崎県	西部環境調査(株)
115	滋賀県	(株)日吉	近江八幡市北之庄町908	0748-32-5111	H17.4.26	滋賀県第2号	157 長崎県	(株)環境衛生科学研究所
91	116 滋賀県	(一社)滋賀県薬剤師会	草津市笠山7-4-52	077-567-2416	H20.4.14	滋賀県第3号	158 熊本県	(株)同仁グローカル
117.3	京都府	京都府保健環境研究所	京都市伏見区村上町395	075-621-4067	H14.4.26	京都府第1号	159 熊本県	大人クテ指三(株)
118	京都府	(社)京都微生物研究所 総合科学分析センター	京都市山科区上花山久保町16-2	075-593-3320	H18.12.21	京都府第2号	160 熊本県	ニチゴー九州(株)
119	大阪府	大阪府立公衆衛生研究所	大阪市東成区中道1-3-69	06-6972-1321	H14.4.23	大阪府1	161 熊本県	(株)再春館安心安全研究所
120	大阪府	(株)東邦微生物病研究所	大阪市浪速区下寺3-11-14	06-6648-7157	H16.12.24	大阪府4	162 大分県	大分県衛生環境研究センタ-
121	大阪府	日本水処理工業(株)	大阪市北区菅原町8-14	06-6363-6370	H17.9.27	大阪府5	163 大分県	(公社) 大分県薬剤師会検査
22	大阪府	(株)総合水研究所	堺市堺区神南辺町1-4-6	072-224-3532	H19.3.26	大阪府6	164 大分県	(株)住化分析センター大分享

123 大阪府	(一社)大阪府薬剤師会	大阪市中央区和泉町1-3-8	06-6947-5481	H20.4.9	大阪府7
124 大阪府	(株)関西環境センター	堺市中区小阪204-27	072-281-0521	H20.8.28	大阪府8
125 大阪府	(株)片山化学工業研究所	大阪市東淀川区東淡路一丁目6番7号	06-6322-0176	H21.4.14	大阪府9
126 大阪府	(株)ケイ・エス分析センター	富田林市錦織南二丁目9番2号	0721-20-5611	H21.4.23	大阪府10
127 兵庫県	兵庫県立健康生活科学研究所	神戸市兵庫区荒田町2-1-29	078-511-6640	H14.4.1	業第02E-0001号
128 兵庫県	(財)ひょうご環境創造協会	神戸市須磨区行平町3丁目1-31	078-735-2737	H20.2.1	業第07E-0001号
129 兵庫県	(株)HER	加西市網引町2001番39号	0790-49-3220	H23.7.22	業第11E-0001号
130 奈良県	(有)奈良環境調和研究所	桜井市栗殿1007-6	0744-49-3744	H20.12.1	奈良県20温第1号
131 奈良県	野村興産(株)	字陀市垄田野区大澤55	0745-84-2822	H21.4.7	奈良県指令消生第343号
132 和歌山県	和歌山県環境衛生研究センター	和歌山市砂山南3-3-45	073-423-9570	H14.4.1	第1号
133 和歌山県	(一社)和歌山県業前師会	和歌山市維質屋町19番地	073-427-1790	H24.7.6	第2号
134 鳥取県	(財)鳥取県保健事業団	鳥取市富安2丁目94番4	0857-23-4841	H14.5.22	環10第1号
135 島根県	(公財) 島根県環境保健公社	松江市古志原1-4-6	0852-24-0207	H14.11.5	島根県第2号
136 岡山県	(財)岡山県健康づくり財団	岡山市北区平田408-1	086-246-6254	H14.5.30	岡山県自第1号
137 広島県	(株)日本総合科学環境技術センター	福山市箕島町南丘399-46	084-981-0181	H14.7.23	広島県第2号
138 広島県	(一財)広島県環境保健協会	広島市中区広瀬北町9-1	082-293-1514	H15.3.7	広島県第3号
139 山口県	山口県環境保健センター	山口市朝田535番地	083-924-3670	H14.4.1	山口薬務第1号
140 山口県	学校法人番川学園宇部環境技術センター	宇部市文京町4番23号	0836-32-0082	H19.9.7	山口薬務第2号
141 山口県	(公財)山口県予防保健協会食品環境検査センター	山口市吉敷下東1-5-1	083-933-0018	H20.12.8	山口薬務第3号
142 徳島県	(一社) 徳島県薬剤師会検査センター	德島市中洲町1-58-1	088-655-1112	H16.10.27	徳島県第2号
143 香川県	香川県環境保健研究センター	高松市朝日町5-3-105	087-825-0400	H14.4.1	香川第1号
144 香川県	(一社) 香川県薬剤師会検査センター	高松市亀岡町9番20号	087-834-5145	H19.7.18	香川第2号
145 愛媛県	愛媛県立衛生環境研究所	松山市三番町8-234	089-931-8757	H14.4.1	第1号
146 高知県	高知県衛生研究所	高知市丸ノ内2丁目4-1	088-821-4960	H14.5.1	高知第1号
147 高知県	(一社)高知県食品衛生協会	高知市丸ノ内2丁目4番11号	088-823-3505	H19.9.5	高知第2号
148 福岡県	(一財) 九州環境管理協会	福岡市東区松香台1-10-1	092-662-0410	H14.4.4	福岡県第1号
149 福岡県	福岡県保健環境研究所	太宰府市大宇向佐野39	092-921-9948	H14.4.17	福岡県第2号
150 福岡県	九電產業(株)環境部	福岡市東区名島2-18-20	092-671-6071	H16.8.2	福岡県第3号
151 福岡県	(公財) 北九州生活科学センター	北九州市戸畑区中原新町1-4	093-881-8282	H17.4.7	福岡県第4号
152 福岡県	(株)太平環境科学センター	福岡市博多区金の限2-2-31	092-504-1220	H17.11.11	福岡県第5号
153 福岡県	(株)シー・アール・シー食品環境衛生研究所	福岡市東区松島3-29-18	092-623-2211	H19.2.22	福岡県第6号
154 佐賀県	佐賀県衛生楽業センター	佐賀市八丁畷町1-20	0952-30-5009	H14.4.10	41第0001号
155 佐賀県	(一財)佐貿県環境科学検査協会	佐賀市光1-1-2	0952-22-1651	H15.10.2	41第0002号
156 長崎県	西部環境調査(株)	佐世保市三川内新町26-1	0956-20-3232	H14.10.29	長崎県第2号
157 長崎県	(株)環境衛生科学研究所	長崎市田中町603番3	095-834-0250	H21.3.17	長崎県第3号
158 熊本県	(株)同仁グローカル	上益城郡益城町田原2081-25	096-286-1311	H16.10.15	2号
159 熊本県	(株)三計テクノス	熊本市東区御領5-6-53	096-388-1222	H18.3.27	3음
160 熊本県	ニチゴー九州(株)	字土市築籠町221番地	0964-22-0131	H19.3.29	4号
161 熊本県	(株)再春館安心安全研究所	熊本市中央区本荘三丁目2番19号	096-366-9372	H24.7.2	5号
162 大分県	大分県衛生環境研究センター	大分市高江西2-8	097-554-8980	H14.4.1	大分県第1号
163 大分県	(公社) 大分県薬剤師会検査センター	大分市大字豐饒字松原464番1	097-544-4400	H14.4.16	大分県第3号

所在地	曾録分析機関名	所在地	連絡先	登録年月日	登録番号	
165 大分県	松尾機器産業(株)	大分市花高松1丁目1番4号	097-556-6277	H19.2.2	大分県第5号	
166 大分県	タナベ環境工学(株)	大分市質来南1丁目1番84号	097-549-4035	H20.8.19	大分県第6号	
167 宮崎県	宮崎県衛生環境研究所	宮崎市学園木花台西2-3-2	0985-58-1410	H14.4.16	1	環境省ホームページより (平成 25 年 7 月 12 日現在)
168 鹿児島県	(公社) 鹿児島県薬剤師会	鹿児島市与次郎2-8-15	099-253-8935	H14.4.1	鹿児島県第1号	
169 鹿児島県	(一財)鹿児島県環境技術協会	鹿児島市七ツ島1-1-5	099-262-0110	H14.4.1	鹿児島県第2号	http://www.env.go.jp/nature/onsen/contact/bunsek
70 鹿児島県	(株)鹿児島県環境測定分析センター	鹿児島市谷山港2丁目5-11	099-201-4177	H17.4.22	鹿児島県第3号	
171 鹿児島県	(株)東洋環境分析センター鹿児島事業所	鹿児島市小野二丁目15番2号	099-218-3311	H19.2.26	鹿児島県第4号	
172 沖縄県	(財)沖縄県環境科学センター	浦添市字経塚720	098-875-1941	H16.11.18	沖縄県第1号	
173 沖織県	(株)南西環境研究所	西原町字東崎4番地4	098-835-8411	H20.3.24	沖縄県第2号	
74 沖縄県	沖縄県衛生環境研究所	南城市大里あざ大里2085番地	098-945-0781	H24.3.26	沖縄県第3号	
				S. D. Tarmanan and A. Santanan		

174 機関

合計

tp://www.env.go.jp/nature/onsen/contact/bunseki_list.pdf